

# Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第24巻第6号 (2017年3月30日)

11 回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993 年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDF フェイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください。

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp)

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

## 24 巻第 6 号 目次

まえがき

基本的人権についての再審

ルネサンス研究所関西 2 月定例研究会報告

グレーバーの貨幣起源論への疑問

第 1 章 都市化以前にすでに貨幣は生成していた

1. 貨幣の起源についてのグレーバーの見解 2. 都市成立以前の古代メソポタミア文明の概要

3. 都市の起源 4. 都市成立前後の交易路

第 2 章 世界貨幣の生成

(参考資料)

グレーバー『負債論』(以文社)ノート

負債経済における対抗政策について(1月例会レジュメ)

## まえがき

今回はひと月遅れになりました。遅れた理由は人類学者グレーバーの貨幣起源論に疑問をもち、反証するために、古代メソポタミアの都市成立以前の歴史について調べたことにあります。最近日本の研究者たちが、都市の成立と、都市以前の交易路について本を書いていることを今年の2月に知り、それを読んでいたのです。小泉龍人『都市の起源』（講談社選書メチエ、2016年）と、後藤健『メソポタミアとインダスのあいだ』（筑摩選書、2015年）がそれです。これらに出会えたおかげで、積年の疑問が解消しました。

貨幣の起源について、ケインズが商品交換からではなく信用からとしているのは有名ですが、楊枝嗣朗が『歴史の中の貨幣』（文真堂、2012年）でマルクス貨幣論を批判してケインズ説に乗り換えたことがあり、しかもこの著作に収録された諸論文は、2003年くらいから『佐賀大学経済論集』などで次々出され、都度読んでいた私にとっては、貨幣起源論はぜひ解明したい課題の一つでした。

原始貨幣論は日本では栗本慎一郎や吉沢英成がポランニーなどに依拠して展開しており、それへの疑問は都度表明してきたのですが、自身が人類学を手掛けることはあきらめていました。ところが、グレーバーの『負債論』（以文社、2016年）を読み、貨幣の起源を信用に求めていることが判明し、楊枝説批判のために古代メソポタミアを調べようとして調べきれなかった課題が、グレーバーの人類学に学ぶことで、見えてきたのです。そして、2015年と16年に上記二冊の本が出ていたことで一気に調査が進んだのです。

調査の結果得られた結論をあらかじめ述べておきましょう。信用起源説は、実は古代オリエントの都市の遺跡から発掘された、楔形文字の書かれた粘土板の解読にもとづいています。ここでは銀が計算貨幣とされているのですが、都市内部での商品交換は未発達であるにもかかわらず、信用（貸借）は一般的で、貸し借りを記録するために楔形文字が利用され、貸し借りの財の評価基準が計算貨幣としての銀でなされていて、こうして貨幣の価値尺度機能が、信用関係記録の尺度として利用されていたのです。ここから貨幣は信用を記録する必要から神殿や王宮の官吏が発明したという話になっています。しかし、この説は都市成立以前に交易があり、共同体間での交易の発達の結果、銀が世界貨幣として成立し、都市成立後には世界貨幣銀が価値尺度として利用されたということが判明すれば、貨幣起源論としては成立しません。逆に、都市成立後の信用の発達以前にすでに銀は貨幣として生成されていたということになります。つまり都市での信用関係記録の計算貨幣銀は、都市成立以前から世界貨幣として共同体間交易（国際貿易）という商品交換から発生していた、とみるのが自然です。

貨幣起源論は別にして、グレーバーのこの書は、世界的ベストセラーだそうですが、借りたものは返すべきというモラルの可否を、人類5000年の歴史を調べることで解明したものです。私は、彼が摘出した商品や貨幣が発生する以前の古代人の負債についてのモラルとの対比で現在のモラルの批判を提起した箇所に教えられて、基本的人権論の再審というテーマを提案しています。私は、ルネサンス研究所関西の2月研究会でこの提案を行い、参加者に議論してもらいました。それでまず、この記録を最初に掲載します。

（メール版まえがきに追加）

グレーバー『負債論』のノートを末尾につけました。若者たちが奨学金の返済に苦しんでいる現状を考慮すれば、この問題での取り組みが緊急の課題であり、その政策立案のためにはグレーバーのこの書の理解が不可欠だと判断しています。ラッツアラートが言うように、負債は階級横断的であり、階級政治とは異なるレベルの政治が要求されています。本を買えない人達に、ぜひ内容を紹介したいという思いです。

くり返しになりますが、グレーバーの本のすごいところは、人類学の知識が身につくことです。私が半ばあきらめていた、古代メソポタミアでの貨幣生成についての調査が可能になったのも、この本のおかげです。引用したいところは、このノートにした分量の数倍はありました。時間がなくて、貨幣と信用のところ中心になっています。

## 基本的人権についての再審

### ルネサンス研究所関西 2 月定例研究会報告

はじめに

2017 年 2 月 25 日に行われた研究会の報告です。私は 1 月に引き続きグレーバー『負債論』（以文社）について報告しました。問題意識はグレーバーの貨幣論に少し異論があり、自説の論証のためには古代メソポタミアの文字使用以前の時代の研究が必要で、なかなかこずっていましたが、やっと基本的な解明が終わり、文章化して後半に掲載しています。

2 月例会では、冒頭にグレーバーのさまざまな提案のうち、見逃せない問題と考えた基本的人権の再審を取り上げて、議論しました。私一人では無理なのでいろいろな人々の共同作業が必要と考え、この日の議論を紹介することにしました。まずは当日のレジュメの冒頭部分を引用しておきます。

### 当日のレジュメ

#### 1. 2017 年調査研究プロジェクト

2016 年調査研究プロジェクトで私自身の課題として、(1) 人間論、(2) 信用論、という二つのテーマに限定しました。しかし人間論はルカーチ批判を予定しておりながら手を付けられないままでした。信用論は負債経済論の解明として、それなりの進捗がありました。2017 年についても私自身の研究テーマとしては、この二つの領域に限定していこうと考えています。

1 月の研究会でグレーバーの『負債論』（以文社）を取り上げましたが、この研究会のあと、人間論についての課題が見えてきました。それはルカーチ批判について保留しながら、基本的人権の再審の方を先行させるということです。また、信用論の領域でもグレーバーの人類学的規模での研究にいくつかの視点の違いがあり、それを究明するために、人類学に即したグレーバー説の検証を試みることにしています。というのもそれが可能なのは、古代メソポタミアの楔形文字が解読され、なおかつ『ハンムラビ法典』の和訳があり、それによって古代メソポタミアについてはそれなりの文献調査が可能だからです。それで今回の研究会では、まず基本的人権論の再審についての研究課題を挙げ、続いて古代オリエントの調査について報告します。(古代オリエントのレジュメは略。文章化して掲載。)

#### 第一 基本的人権についての再審

##### 1. この問題についてすでに作成した研究課題を次にあげておきます。

研究へのお誘い：グレーバーを深める

2017 年 2 月 10 日 境

(1) グレーバーは『負債論』（以文社）で古代人の負債論について次のように述べている。

自己の存在をなにに負っているか。古代人の考えを現代風に示してみる。(要約)

① 宇宙と宇宙の力、つまり自然。=存在の基盤。「これに対する負債は儀式によって返済される。儀式は小さきわれわれを凌駕する存在すべてへの敬意と承認の行為である。」

② 知識と文化的成果に対して。「それらの人びとに対する負債は、わたしたち自身が学習し人間の知識と文化に貢献することで支払われる。」

③ 祖先に対して。「じぶん自身が祖先となることで返済される。」

④ 人類全体に対して。「異邦人に対する寛容によって、人間的諸関係つまり生を可能な

ものにする、社会性にかかわる基本的なコミュニズム的土台を維持することによって返済する。」(101~2頁)

「このように整理してみると、議論が前提そのものをむしばみはじめる。これらは商業的負債とはなんの関係もない。」(102頁)

「すでに万物を有しているゆえに神々との取引が不可能であるとすれば、宇宙との取引もまちががなく不可能なのだ。」(102頁)

「人類または宇宙から分離した存在としておのれをみため、こうして一対一の取引を可能であるとする想定自体が、死によってのみ返答の与えられる犯罪なのである。わたしたちの罪責性は、宇宙に対する負債を返済できないことによるものではない。わたしたちの罪責性とはく存在するすべて、またはこれまで存在してきたすべて>と、いかなる意味であれ同等のものであると考えるほどおもしろいあがっているため、そもそもそのような負債を構想できてしまうことにあるのだ。」(102~3頁)

### (2) 負債論の観点からのグレーバーの問題提起

「今日の個人主義的な社会にふさわしいエートスを求めるとするならば、次のようにいえるだろうか。ひとはみな人類、社会、自然または宇宙に対して無限の負債を負っているが、べつのだれかが支払い方法を指示できるわけではない、と。これは少なくとも知的には筋が通っている。もしそうだとすれば、確立された権威のシステムのほとんどすべて——宗教、道徳、政治、経済、刑事司法体制——をそれぞれ異なる欺瞞の方法とみなすことができる。それは計算不可能なものを計算できるとうそぶき、制約なき負債のうちのあれこれの部分をかくかくしかじかのように返済せよと指令する権限を詐称するにすぎないのだ、と。だとすれば、人間の自由とは、返済方法をどうしたいかをじぶん自身で決定するわたしたちの能力ということになる。

わたしの知るかぎりこれまでこのような発想をした者はいない。実存的負債についての理論は、そのかわり権威の構造を正当化する——あるいは権威の座を主張する——手段に常に墮してきた。」(103頁)

### (3) このすばらしい発想を生かしてみよう。

基本的人権の目録の再定義が必要だ。人間とは何か、と問うときに「人は、自由、かつ、権利において平等なものとして生まれ、生存する。」というフランス人権宣言第一条の再審が必要である。

すでにフェニズムが指摘しているように、このような人は「ケアレスマンモデル」であり、現在の成人男子のイメージを押し付けたものだ。現実には人はケアされないと生きていけない未熟児として出産され、長期に育成期間を要して男性は「ケアレスマン」(それも家族の援助付きの)となる。グレーバーの指摘に従って、人権宣言を「欺瞞の方法」として批判してみませんか。

## 2. 基本的人権論再審についてのいくつかの視点(共同研究の課題として)

- (1) アメリカの人権外交
- (2) 旧・現「社会主義国」への人権欠落という批判
- (3) ホブズとルソー
- (4) 人権宣言
- (5) クロポトキン相互扶助論をはじめとするアナキストの人権論
- (6) 現代日本の立憲主義

以上の提案に、資料としてフランス人権宣言、世界人権宣言、そして、大窪一志訳、クロポトキン著『相互扶助再論』(同時代社、2012年)から訳者解説のコピーをつけました。私の方で30分ほど説明の後、討論しました。

## 基本的人権再審についての討論（2017年2月25日）

●後藤：現代に限らず、近代批判ということで、西洋近代が前提にしている人間観とか世界観とか価値観、そういったものを相対化した上で、相対化にとどまらずにどういうものを共通の我々が大切にすべきものとして新たに生み出すのかということのイメージを打ち出していかなければならない、というふうには私は思っているという意味では、この領域について議論をして、何かしらの共有し得る原理的な考え方を伝えていく、という作業自体は必要なことだとは思いますが。

私は仕事柄ということもあって、先住民の人たちとの関係をどのようなものとして作らなければならないのかとか、西洋近代的な社会編成原理を持っていない、あるいは人間観・世界観を持っていないコミュニティが存在していて、そことの関係をどのようなものとして作り得るのかということ、それなりに考えてきたつもりなので、ここで言われていることも「そうだろう」というふうには非常に私的には納得はしているんですけども。

ただ、その上で、例えばこの大窪さんの議論はちょっと今更的な感じがします。人間というものを社会関係の総体として捉える、しかも人と人との関係と、人と自然との関係の双方を生産様式論というか、どのように生産をして、自然との物質代謝をしながら社会を作ってきたのかということ、マルクス自身がもう既に言っているわけじゃないですか。ルソーやらホブズやらには、時代的な制約が当然あるのはしょうがないことだと思うんですけども、人権宣言で述べられているような近代西洋的な人間観とか自然観、世界観から世界全体を見る、歴史全体を見る、あるいは人間の本質を見ようとする立場に対する批判的観点を、マルクス自身が打ち出していると言えるんじゃないかと思うんです。なので、そういうマルクスの捉え方が、ここで参照されているクロポトキンとかその他アナキスト系の思想家たちと、何が同じで何が違うのかが検討されるべきだと思います。

また、課題として(1)から(6)まで挙げてあるんですけど、もうひとつ付け加えるとすると、近代以降の諸運動の中でブルジョア的な、あるいは近代西洋的な人間観とかいうものではないものが、いろんな形で、新しいものが提起されているはずで、そのひとつの試みがグレーバーの議論だと捉えることができるんじゃないかと思うんですけど、それらの社会運動的な観点からするとその必要性に焦点を合わせるという角度も必要ではないか。アメリカとかソ連に対する批判とかいうことだけではなくて。例えば協同組合論的な組織観とか、その中での組合員の権利義務関係みたいなことが持っていることの意義と限界みたいなところ。意義と限界を明らかにしようと思えば、それを包摂するような別の原理を共有して初めて意義と限界が措定し得るわけで。じゃあ、例えば協同組合的な原理とか、権利義務関係を超越するものをどのように実践的に構築し得るのかというような、運動自身が逢着する、あるいはしている問題をどう乗り越えるのかというあたりと結合させながら議論をするということも必要ではないか。その2点です。

●新開：文脈から言うと協同組合という問題と、もうひとつはいわゆる民主主義論。例えばシールズ的なこの間の戦争法案反対闘争とか等々で、3.11以降現れている世界的なある種の民主主義論みたいな潮流に対して、我々がどういう原則的な考え方を言うかということが、現実の運動論としては非常に重要じゃないか、と俺は最近思っているわけ。だから、今度の反戦共同行動と共同で連続講座みたいなのをやるので、この4月にやるシンポジウム(4月15日)は、ママの会の西郷さんと大野君という立命の崎山さんのお弟子さんと呼んでやるんだけど、そういうことを念頭に置いて対話してみようということなんやな。連中はどういう考えを持っていて、我々はどういう考えかということ突き合わせてみようという意味なんや、このシンポジウムは。

それともうひとつは、西谷修さんがトランプのアメリカという講演をやるでしょう、このチラシ(3月26日午後2時~5時、ウィングス京都)を見ていると、西谷さんの『アメ

リカ異形の空間』というのがあるでしょう、講談社メチエから出ているやつ。せっかく呼ぶんだからちょっと読んでおこうと思って読んだんだけど、アメリカ的な西洋近代の範疇なんだけど、やっぱり一連のフランス革命等々のホップズ、ルソー的なものが、アメリカの独立とアメリカの制度に至る過程でアメリカ的な受容のされ方をしているわけですよ。それは代表的にはトクヴィルで、トクヴィル自身はフランス人だけど、アメリカに1830年代に行って、広く見聞して、それに基づいて、直接的にはフランスとアメリカの民主主義を比べてどうかということ論じているわけや。だから、片一方で西洋近代の範疇なんだけど、やっぱりアメリカ的民主主義というのが濃厚にあるわけですよ。片一方で権力側のホップズ、ルソーに発するところの民主主義論と、アメリカに行ったその変容と、あるいはまた、他のところでどういう格好での受容のされ方によって民主主義というのがどう変容されているか、つまり権力側の民主主義論みたいなものがどういうふうに変容され、制度化されているか、みたいなことを片一方で対極に分析して、片一方で特に運動論的な3.11以降現れている世界的な民主主義論を批判的に、あるいはどう我々の考え方を述べるかということが、俺自身は最近の問題意識なんやな。

●後藤：私が次に予定している3月20日の報告で、その問題を取り上げようと思って、今準備をしているところなんですけど、ネタ的には廣瀬さんの報告と、ネグリとハートの『反逆』という2011年の動きをどう見るべきなのかを分析した本と、グレーバーの『デモクラシー・プロジェクト』でしたっけ、その3つくらいを使って、とりわけ2011年以降の占拠闘争で示されたものの意義とその限界みたいなことを報告したいと思っています。この間、グレーバーの本を読んでいたんですけど、とても面白いと思います。アメリカの民主主義についての彼なりの解釈を、1章割いて触れてあるんです。まあ、彼ならこういうふうに捉えるだろうなという範疇ではありますけれども、でも、それなりに面白く読める章だと思いますので、読まれたらいいんじゃないか。もう読まれましたか？

●新開：読んでない。

●後藤：ちょっと紹介しておく、要するに水平的な運動が構築されたというふうには捉えているんですね。要するに下からのエネルギーが表明される形態であると。それが3者に共通している捉え方だと言える。既存の政治党派の影響力を凌駕、超越している。規模的にもそうだし、エネルギー的にもそうだし、問題の立て方でもそう。つまり、ヘゲモニックに介入できた党派はいないということ。ただ、水平的な問題だけだと、既存の国家権力、ブルジョア的な国家権力に対して影響力を行使するルートを持たないという限界を持っていて、それをなんとか突破しようという試みがいくつか行われる。ポデモスなんかはその最たるものだと思いますけれども、つまり下からのエネルギーに乗っかって、新たな政党を立ち上げて、政治権力を握ろうという試みですね。恐らく、サンダースの運動もそういう文脈の中に位置づけることができると思います。

実際、この間のアメリカ大統領選挙の前には、Occupy Wall Street を名乗るグループと、Black Lives Matter：黒人の人生は大切にすべき重要な問題なんだという意味ですが、そういうグループがいて、その2つがバーニー・サンダースを支持するという声明を出している。恐らく、アナキスト的なグレーバー的な連中と大分議論があったんじゃないかと想像するんですけど、グレーバーとかは基本的に既存の政治制度に参加するのを徹底的に拒否するという立場なので、そういう内的な論争も多分あったんだろうなと思っながら見ているんです。

で、スペインで何が起きているかということ、完全にポデモスはトップダウンになってしまって、しかも実際の運動、草の根の、下からの構成的な組織に依拠するものではなくて、メディアを通じて著名人が政治的討論番組に参加して、論敵を打ち破るというパフォーマンスを通じて票を伸ばしてきた、というような捉え方なわけですよ。それによって、水

平性が保持していたエネルギーとか、新たなものを作り出すという創造性を、そういうポデモス的な形における垂直性と結合させるという試みは、ポデモスにおいては失敗している。しかしながら、他方で、広場を数週間そこに住み込んで占拠するという形態が、いつまでも長期的に持続するわけではないので、その水平性自身が持続性を持たない運動のありようになっている。という中で、しかしながら、新たにいろんな 15Mから生まれた社会運動が作り出されていて、社会のいちばん底流においては、示されたエネルギーが別の形をとって現れてきている。そういう中で問われている問題の 1 つは、そういう大衆運動のエネルギー、水平的なエネルギーをどう作り出し得るのかという問題。それと同時に、それらと結合してどのような政治権力へのアプローチのしかたを構想し得るのか。というあたりのことが、恐らくアメリカでもヨーロッパでも求められている、と言えるんじゃないかと、今の段階では思っています。その上で、日本の現状をどのように捉え、その中で共産主義者であろうとするということはどういう方向に働きかけることなのか、というあたりのことが考えられたらいいかなと。そのあたりのことを報告したいと思っています。

●新開：廣瀬純の例の『資本の専制、奴隷の叛逆』（航思社）、あれを俺はこう読んだんやな。つまり、廣瀬が言いたいのは、特にスペインについて、その性格というのは今君が言ったとおりでと思うけど、片一方でラツアラートとの対話、インタビューがあるでしょう、もうひとつ廣瀬が評価しているのはバルサロナ・アン・クムー、住宅問題に発したバルセロナの、一言で言えば社会運動だね。ポデモス流の広場とかマスコミを通じた、言わば急進民主主義的なことが、社会変革という問題を非常に視野に入れていないんじゃないかと、あれは暗に批判しているんだと俺は思うんだ。ああいうバルセロナの住宅問題みたいなことを通じてね。ラツアラートインタビューを読んでも、ギリシアだとかそういうことを含めて、結局、社会革命、社会変革という視野は非常に薄いんじゃないかということも廣瀬は言っているんだと、そう読んだんやな。それは確かに当たっていると思う。日本の安保法案での民主主義とシールズに代表される、そのバックグラウンドにいる高橋源一郎等々の連中の民主主義論というのは、まさに同質のものだと思うんや、俺は。

結局、ああいう議論をやっていたら、袋小路に入るのは当たり前だと思うんやな。社会変革という問題を視野に入れずに、直接民主主義か間接民主主義かみたいな話に結局なってしまうんだよ。それを行きつ戻りつするわけだ。基本としては、直接民主主義でやらんといかんと言いながら、やっぱり現実的にはそういう力量が無いから、間接民主主義の範疇に陥るみたいな、循環運動に陥っていると思うんやな。

もうひとつ廣瀬ので思ったのは、バルサロナ・アン・クムーを持ち上げて、アレは女性の市長が誕生するわけでしょう、それをバックにして。ある意味で協働闘争なんだけど、その場合、単に社会運動、社会変革を視野に入れればいいかという話ではなくて、急進民主主義運動の質が問われると同時に、やっぱり社会運動の質も問われていると思うんや。同じ時代でどっちが進んでいるというようなことは、俺は多分言えないと思う。本質的には同質だと思う。つまり、住宅問題等の社会運動を視野に入れるという意味では、視界は広いかもしれないけれども、運動の質としては、水準から言えば、同レベルじゃないかと思う。本質的な社会変革ということに踏み込んでいないということや、ああいうものは、非常に限界のあるものとしてバルセロナの運動はあるのではないかと思っているわけ。だから、それを超えるものは、やっぱり水準を同時的に超えないと。ポデモスとバルサロナ・アン・クムー運動を同時に超えるような何物かということを目指しないと、本当の意味での革命というレベルには到達しないんじゃないかと、俺はそういう感じでアレを読んだな。

●後藤：それは私も同感です。ただ、捉え方としては、社会運動なるものは、スペインですからね、アナーキズムの伝統的な影響力が膨大にあって、協同組合運動を始めとして、あるいは労働組合もそうですが、非常に根強いものがあるわけですよ。左翼的な、アナーキストも含めて左翼的な運動というのが、ただ、2011年ということが、やっぱり2008年に

規定されていて、もちろんその前の数十年の膨大な不況とか経済停滞ということが当然背景にあるんですけど、社会がにっちもさっちも行かなくなっているということの上で、15Mという2011年5月15日にマドリードの広場を数十万人が占拠する。その後も、もちろん数十万人が全員そこに寝泊まりしたわけじゃないでしょうけど、数万人規模で占拠運動が数週間継続する。これが全く新しい質だというわけです。

それは単に、個別社会運動に取り組む PAH とか、バルサロナ・アン・クムーとかいう話のレベルではなくて、数万人が共同で寝泊まりをして、アナーキストたちの意思決定のしかたを採用して、ゼネラルアセンブリーとかスポークスカウンシルとかいう形で意思決定が行われるという経験を、数万人規模が数週間にわたって経験しているということから生み出されている新たなものがそこにあるんだという、これは恐らく廣瀬さんの本でインタビューされた論者の共通した理解だと思うんです。それをどう発展されるのか、その水平的に発揮されたエネルギー、噴出したエネルギーにどう形を与えるのかということが、いろいろ試行錯誤されている。そのひとつの試みがポデモスであり、そのひとつの現れ方がバルサロナ・アン・クムーである。そういう意味では、同じ地平にあって、両者ともその地平をどう突破するのかということが問われているという点ではそのとおりだと思うんですけど、しかしながら、ああいう共同性を数万人規模で体験してしまったことによるエポックメイキングなことが、そこに確かにあるんだということが前提になっているということです。

●新開：それはそうなんだよ。ただ、そういう共同体験はそれこそ革命の基礎だから、そのとおりだと思うんだけど、じゃあ例えば、アラブの春の一連の運動だとか、今で言えば韓国の反朴槿恵の運動だとか、それとしてはそうなんだけど、その中でのヘゲモニー、それがやっぱり常に問題だと思うんや。1つ勢力としてそういうことをリードする、そういうのがどう形成されるかということは、常に問題だと俺は思っているわけ。だから今の韓国の運動でも、数百万が登場したという意味で、それとしては意義あるし、日本だって安倍を通じた運動というのはそういう格好で体験したということは、基礎的なベースではそのとおりなんだけど、やっぱりその中でのヘゲモニーが何かということの問題にしないと、結局どこかでいわゆる「壮大なゼロ」みたいな話になっていくでしょう。

●後藤：まさにそこなんです。論じられていることは、要するに垂直的な、中央集権的な前衛ではないというのがひとつの結論なわけです。なんとなれば、そういうものを民衆は拒否する、そのようなものは受け付けない。なので、ポデモスも一時期40%、50%という支持率を誇ったけれども、さっき少し言ったような組織形態にどんどん変容して行って、支持率が十数%まで落ちるというようなことの原因を、そこに見ようとしているわけです、つまり、今や大衆そのものが、そういう垂直的な指導、誰かが俺たちを指導してくれるのを待ってるみたいな話にはならない、既になってない。だから影響力を持ち得ないんだというのが、彼らの異口同音に言っていることなんです。じゃあ、しかしながら、それに代わる垂直構造を持たずに権力構造そのものを変革しうる政治組織というのが成立するのかどうかというのは、1つの論点として提出されていて、いくつか試みられてもいる。例えば「政党X」という、全く水平的な構造で政治党派が作れないか、みたいな試みがなされている。失敗したらしいですけど。詳しいことはわからない。ただ、とりあえず民主主義的と言っておきますが、民主主義的な水平性を保持したまま、いかに政治を構築し得るのかということが、まさに問われている。かつてのような「レーニン主義的」な、「ボルシェヴィキ的」なやつではダメだというのが、彼らの結論的な見解なわけです。

●榎原：いいですか？ 僕は、運動にヘゲモニーをとるような指導部がなかなかできないという問題は、基本的に、今まで、特に戦後の運動は、社会はだんだん良くなっていく、市民社会はだんだんマシになっていくという前提で、基本的に組み立てられているわけじ



やない。社会民主主義はもう典型的だし、日本共産党だってそうや。だんだん良くなるでしょうというね。ところが、それが、いつ頃からか、正確にはわからないけど、とにかくどんどん悪くなっているわけ。そうすると、人はいっぱい集まるけれども、「どうするんか？」ということに関して、「より良い社会」ってみんな言っているわけだから、どうしようもないわけね。そこにもものすごく大きな行き違いがあって、どんどん悪くなってる社会に対してどういうふうにするかっていう、基本的な構想がまず要ると思う。それはね、生活クラブを考えてもそうだし、社会連帯経済の国際組織（GSEF）が昨年モントリオールで大会をやったが、あれも基本的には市民社会は良くなっていくという前提の上に組んでいるから、それが悪くなっていったらすごくしんどいんだよね、実際。それが悪くなったときにどうするかっていうことを早いこと決めて、出さないかと僕は思ってるんだけど。

例えば、ノアの箱舟のたとえで言うと、生協にしても福祉事業にしてもノアの箱舟と位置付けて、自分たちだけが助かるのではなくて、溺れている人たちをどうするかという発想が必要だと思う。

●後藤：『デモクラシー・プロジェクト』（航思社）という本の中でグレーバーが面白いことを言っているんだけど、マルクス主義的な組合と、アナキスト的な組合では、伝統的に要求するものの対立があった、と言うわけです。マルクス主義的な組合は、官僚主義的統制と同意を要求する代わりに、より高い賃金を要求して、それを組合員に提供する。それで消費欲求を満たす。まさにフォーディズムの時代まではそういうものが機能してきたわけじゃないですか。経済的なメリットを与える代わりに、我々の指導に従えという構造で、組合運動が展開されてきた。ところが、アナキスト的労働組合運動というのはそうではなくて、時短の要求である。つまり、市民社会が良くなるということのひとつの重要なファクターが、より豊かな、より消費欲求を満たすということを含むとすれば、アナキスト的な労働組合は、そういうことは求めてこなかった。むしろ自由時間。その自由な時間を使って、いかに創造的な活動ができるか、新しい価値を創造するような活動を自分たち自身が作り出せるのか、そちらに重きを置いてきたんだ、みたいなことを言っているんです。もちろん、第三世界の貧困の問題というのは厳としてあると僕は思っているんで、そのへんの問題についての留保は持ちつつも、しかしながら、少なくとも先進国においては、もしその二分法をそのまま受け入れるとすると、アナキスト的な要求が今や必要になっていると。そうでなければ、既にエコロジー的にも持続可能性は無いというのは、ブルジョア学者でさえ声を大にしてみんな言い始めている、ということではないかと思っ

ているんです。

●樺：ちょっと話がずれるかもしれないんですけど、クロポトキンが相互扶助論で言っていることは、僕も大分若い頃読んだんですが、結局、人間というか動物も含めて、元々社会性があるということを書いている。だから結局、ここで引かれているフランスの人権宣言とか世界人権宣言、これは要するにこういうことを謳って、誰が保障するのかというと、国家が保障するんですよね。国家によってこれを保障するとなっている。これを徹底的に否定するわけですよ。そんなもんはイヤと。だから、ここに書いてあるような条項みたいなものを謳って、それを国家に保障させるなんていうことが、そもそも間違いなんだという考えで、そんなものはそこらへんの動物でもやってるんだ。既にやってると、そんなものは。それをクロポトキンの相互扶助論を読んだら、動物がたくさん書いてあるんです。いろんな動物がどういうふうにして生活しているか。彼は相当博学ですからね、動物学者でもあるみたいですし。そういうことをいっぱい書いてあるんです。人間の中にも動物の中にも、本来そういうものは備わっているんだと。逆に、こういうものを謳って国家に委ねようとすることによって、様々な矛盾や抑圧が生じているんだという、大体僕はそういうふう理解してたんですね。

だから、根本的にアナキズムの考え方というのは違うところがあるというのはありますし、ある種そういう人間の本質みたいなものがいろんなところで出てくるわけですね。

ウォール街オキュパイをやったときなんかでも、ダーツとみんな集まってきて、なんだかんだ言いながら、とにかく自分たちで一定の空間を運営するみたいなことをやっちゃうわけです。いろんな闘争の現場でもそうです。あるいは災害ユートピアと言われるようなのも、あらゆる人間を巻き込んで、そういうことがワッと出てくる。阪神大震災でボランティアに行った人たちは、あれを忘れられないからね、至るところへボランティアに行ってるっていう。あの感覚は忘れられないんですよ。それはわかりますわ。

だから、そういうものをやっぱり、そこに本当にしっかりと依拠して、どう運動を作っていくのかという問題はずっと出てきている。それと、そういうふうな運動が次から次と出てくるというのは、結局のところ、今の資本主義以降の近代国家のもとで社会が形成されているという、この社会のあり方が極めて例外的、人類の歴史の中で非常に例外的な事態が、100年か200年、2~300年ちょっと続いていると。しかしこれは極めて例外的な事態なんだというような捉え方ですね。

だから、こういうものがずっと続いている、人権宣言に謳われているようなことは普遍的でも何でもなし、これは極めて例外的なことを、極めて例外的な状況だからこういうことを言わなきゃいけないというようなものなんだというような、そういう捉え方。一旦そういうことに何らかの形で触れた人たちというのは、なかなかそこから抜けられなくなる。左翼の運動にいつか入ったら、なかなか抜けられなくなるのと似たようなものなんですよ、はっきり言えば。そういうところをもう一度きちっと見ていくというようなことが必要なんじゃないかなと。

今の普通の人々が生活を営んでいるんですけど、その中にやっぱりいろいろ重要な問題が孕まれている、あるいは社会変革といった場合の具体的なヒントというか、糸口みたいなものは、その中に、そこだけではないですけど、そういう観点も作り出していく必要があるかなと思いますけどね。

●新開：まあね、「ブルジョア社会はけしからん！」とか言いつつも、発展することを一方では願っているわけや、マルクス主義者自身もね。そういう時代はもう終わったという認識をせなアカンということや。

●椿：アナキストって、あんまり社会を発展させるというような、そういう考え方じゃないですからね。

●榎原：うん。だから結局ね、マルクス主義は「社会」っていう観念が無いねん。経済があって、階級闘争があって、矛盾があって、政治権力を倒さなアカンと、それぐらいで、社会ということに関して無いですよ。「市民社会論」ってあったけどさ、あれだって実は「政治社会論」じゃないですか。アナキストが言うような社会観は無いしね。

●椿：グレーバーの本の中で彼が言っているのは、確かに資本主義社会の分析とか、そういうことについては、これはもうマルクス主義者のほうがはるかに優れていると。アナキストはそれを分析しないわけですよ。むしろ何をしているかということ、結局、自分たちの集団の中での、一定の地域だとか集団の中で、どうやって合意が形成されるのか、合意形成をどうやってやるのかというようなことについては、一生懸命いろいろ考える。社会の成り立ちとか、経済とか、そういうことはない。プルードンは結構考えてると思うんですけどね。

●斎藤：あのメール見させてもらって、「え、何これ？」って。悪く言っちゃうと、戯言にしか・・・。ただ、6つの課題に関して言えば、それぞれのイデオロギーがどういう時代背景から生まれたかを分析するのは、僕はいいと思うんですけど、そういうんではないんですよ。なので、ちょっとどう見たらいいのか、さっぱりわからない、私の思考回路でい

うと。例えばアメリカの人権外交で言うと、パッと思い浮かぶのはイギリス帝国主義に対するアメリカの介入。第一次大戦までの英国支配に対して、アメリカがどう食い込むかという、その時点で人権というか平等とか、自由とか、強者に対して弱者が自由というか、君の持っているものをほしいというだけの話であって、表向きは人権宣言に書いてあるようなことを言っているんだけど、目的は違ふと。そこらへんの発想で見ると、裏に隠された彼らの意図とか、経済的利害とかいう発想に、どうしてもなっちゃうんです、自分の発想でいくとね。それはいわゆるマルクス主義的な発想なのかもしれませんけど。なので、人権そのものを論議するという発想についていけない。3月の集会を楽しみにしています。

●榎原：結局、議会制民主主義はイチジクの葉っぱであるという、そういう話やろ。なんでその葉っぱを研究せなアカンねん？ということやな。

●新開：俺はむしろさっき言ったように、ある種民主主義論というのが流行りなわけだよ、シールズからね。だから、そういうことに対して、我々が何物かということ、俺はそういう意味では党派的なんや、はっきりさせようってことや。

●榎原：僕はもっと中間的で、今の若い人の運動的な感覚のレベルで言ったら、それこそある意味宗教の言葉みたいなことを言わないと通じないと思う。だって本当にびっくりするけど、例えば何人かの若い女性と話してるけど、そうしたらね、「こういう組織作りました」って言って、まっとうな名前がついてんねん。「何人でやってるの？」って聞いたら「1人です」って。そんなんやな。「〇〇委員会」とか言うけど、1人で作ってるんですよ。信じられる？

それこそね、ネチャーエフの委員会と一緒に、存在しないものを存在するかののごとく言っとんねん。若者の場合組織のイメージがないので、それで平気なん。

とはいえ、ずいぶん前から「半農半X」というライフスタイルを提案している塩見直紀のことが3月8日の朝日夕刊に出ているが、この人も一人で研究所を名乗って、だれもかれもが一人研究所を立ち上げるように呼び掛けていた。朝日の記事によれば、塩見の提起はアジアで受け入れられ、講演に呼ばれているという。ある意味、自分のやっていることをみんなに模倣してほしいという組織論かもしれない。だから一人でも踏み切れる。(この部分後日追加)

そういうのがひとつと、あとは、まずマルクス読んでないし、『資本論』読んでないし、そういうレベルの理屈はもう全然素通りしているわけよ。だから、「人間って何？」とか、「友達とは何？」とか、そういうことで何かワツと言わなきゃいけないような気がする。だから、逆に言ったら「人は生まれながらに自由でとか言ってるやん、こんな嘘やで」とかいうレベルで議論しないとアカンと。

●新開：だけど、今のシールズに代表される民主主義論みたいなことは、そういうことでの考え方でいったらどうなるかみたいな、それに即して批判すべきだと思う。マルクス主義だって融通きかんってことを言ってしまうと、その通りなんだけど、そういうことを言っても通じないということは、その通りなんだ。だけど「あんたらがやっている民主主義論でいったら、結局こうしかならへんよ」ということを、あるいは「あんたら、単純に直接民主主義とかみみたいなことを議論していたら、物事に対する、今の世の中に対する説明つかへんやないか」というようなアプローチせんとアカンのちゃうかと俺は思ってる。シールズのことを読んだりすると。

●後藤：直接行動主義と直接民主主義というのは、ちょっと位相が違ふと思ってるんです。つまり、私は直接民主主義を拡大していけば、今のブルジョア的な議会制度ではない、それこそ構成的な権力、水平的なもの構想に行き着かざるをえないと思っていて、とこと

ん推し進めればですよ。そういう方向と、直接民主主義論をデモをする権利とか、デモをすることであるとか、集会をすることであるとか、今の議会制民主主義を前提にした上で、その外で何かしらそういうことをすることが積極的な意味があることなんだというふうに言うのと、僕としてはその間に分岐を作らなければいけないんじゃないかと思う。

●新開：そのとおりだな、それは。

●榎原：それでは、いっぺんここで休憩して、後半やらせてください。  
(以下略)

## グレーバーの貨幣起源論への疑問

はじめに

情況寄稿論文『トランプ登場の背景を論ず』(本誌前号掲載)で述べたように、現在のグローバル資本市場(中心的にはニューヨークの株式市場と公社債市場)においては、借りた貨幣を資本として機能させる近代的利子生み資本よりも、太古の時代から存在していた高利資本の現代版である消費者金融等の債務証書を束ねて証券化した金融商品が、ハイリスク・ハイリターンのジャンクボンドとして、公社債市場で売買され、その取引高が国債や社債を凌駕するようになっていた。リーマンショックでこれらジャンクボンドが破綻した時に、その救済策が近代的利子生み資本破綻(株式市場での暴落)の救済策とは異なり、中央銀行による不良債権の買い入れと前例なき金融緩和、そしてその結果としてマイナス金利政策となっている。

マイナス金利とは、資本 - 利子、労働 - 労賃、土地 - 地代、という資本主義の外観の第一の要素である資本 - 利子の否定であり、ひいては資本主義の否定である。従来資本主義の総本山としての役割を担ってきた中央銀行が、資本主義の外観の否定をし続けないと、今回のジャンクボンドの救済策が継続できないという事態は、そもそも負債とは何かという問題を浮かび上がらせてきた。

負債論については、すでに紹介したラッツァラート『借金人間製造工場』(作品社、原書発行年、2011年)があるが、新しくグレーバー『負債論』(以文社、原書発行年、2011年)が翻訳された。どちらも2008年のリーマンショックに示唆を受け、ジャンクボンドの破綻の意味を負債論という形で解明しようとする労作である。

ラッツァラートは、「負債経済論」の確立を追求しようとしており、またグレーバーも「負債帝国主義論」を提唱している。しかし双方とも、近代的利子生み資本についての理論が欠落していて、それぞれの負債経済論には欠陥がある。今回はグレーバーの説を紹介しながら、その欠陥について補足していくことを考えたが、しかしその前にグレーバーの貨幣起源論が気になり、まずは貨幣起源論の問題点について考察することにした。

### 第1章 都市化以前にすでに貨幣は生成していた

#### 1. 貨幣の起源についてのグレーバーの見解

グレーバーは第二章 物々交換の神話、でアダム・スミスが唱え、今日の経済学の教科書で一般的に取り入れられている説明を神話とみなしてその批判をおこなっている。その批判は古代メソポタミアの経済の分析に基づいている。楔形文字と象形文字の解読で、今

日では、スミスが依拠したホメロス（前 800 年）から前 3500 年へと歴史を押し戻したとみなして、古代メソポタミアの経済を論じている。少し長いがグレーバーの説を紹介しよう。

「楔形文字による記録のほとんどは金融についてのものであって、わたしたちがメソポタミアについて多くの知識を有しているとしたら、そのめぐりあわせゆえにである。

シュメール人の経済は巨大な神殿と宮殿の複合体によって支配されていた。これらの機構は、聖職者や官吏、工房で働く工作者たち、巨大な地所で働く農民や牧羊者たちなどからなる数千人のスタッフを抱えていた。古代シュメールは数多くの独立した都市国家に分かれていたが、前 3500 年頃、メソポタミア文明の幕が上がるまでには、神殿の管理者たちは、単一の統一された会計業務の体系を発展させていたようだ。ある意味ではこの体系はいまもわたしたちに受けつがれている。というのも、1 ダースとか 1 日 24 時間といったことをわたしたちはシュメール人に負っているからである。基本的な貨幣単位はシェケルであった。1 シェケルの重量の銀は、1 グルないし 1 ブッシェルの大麦と等価とされた。1 ミナは 60 ミナスに分割されたが、1 シェケルは一人前的大麦に相当する。これは一カ月は 30 日ということと神殿の労働者たちへ的大麦の給付は一日二度であることという原則にもとづいていた。この意味における『貨幣』が商業取引の産物ではないことは容易にみてとれる。『貨幣』は、実質的に官僚たちによって発明されたものであり、その目的は貯蔵資材の動きを管理とさまざまな部門間での物資のやりとりの差配だったのである。

神殿の官僚たちはこの体系を利用して負債（地代、手数料、貸付金など）を銀で計算していた。銀が貨幣であったのはその結果である。そして銀は未加工の塊として、スミスの表現によると『組成の延べ棒』として流通していた。これについてスミスは正しかったのである。だが、彼の考察で正しかったのはその部分のみである。というのも、そもそも銀の流通量はさほどのものではなかったからである。銀のうちほとんどは、神殿や宮殿の宝物殿にうやうやしく鎮座し、なかには用心深く保管されて、文字通り数千年のあいだおなじ場所にとどまることになった。銀の鋳型を規格化し刻印すること、権威をもって純度を保証するなんらかの制度を創設することはたやすかったはずだ。だがそうする必要を感じた者はいなかった。ひとつの理由は、負債が銀によって計算されていたにせよ、それが銀によって支払われねばならないわけではなかったからである。実際に負債は多かれ少なかれ手元にあるどんなものによっても支払い可能だったのである。神殿や宮殿のあるいはその官吏に借金のある農民たちは、ほとんどの場合、大麦で負債を清算していたようだ。だからこそ銀の大麦に対する比率を固定することがかくも重要だったのである。とはいえ、羊や家具、瑠璃をもってしても、受領に支障はなかった。神殿や宮殿は巨大な産業機構を形成していたのである。だから利用法のないものはほとんどないというわけだ。

メソポタミアの各都市に出現した市場においても、商品価格はやはり銀によって計算されていた。そして神殿や宮殿による統制に完全に服していない商品価格は、需要と供給にしたがって変動する傾向にあった。しかしここでもまた現存する証拠資料の示すところによれば、ほとんどの取引が信用を基盤としていた。取引に銀を実際に使用した数少ない人たちは、商人（神殿のために活動することもあれば自由に活動することもあった）であった。しかし、その彼らでさえも、ほとんどの取引は信用によっておこなっていたのである。ましてや、『エール女』や地元の居酒屋からビールを買うような一般の人びとは、やはりここでツケで飲んで、それから収穫期に大麦だったりあるいは手元にあるもののかき集めて支払っていた。

ここにいたって貨幣の起源にかんする旧来の物語はほとんどあらゆる点で崩壊してしまう。」（60～62 頁）

楔形文字が解読されて以降の古代メソポタミアの経済の研究は飛躍的に進んだ。かの有名なハンムラビ法典も翻訳されており、邦語文献も多数ある。したがって、人類学の専門家でなくとも、グレーバーのこの説の再検討は可能である。グレーバーの長い引用から貨幣生成論の部分を取り出すと次の内容となる。

「『貨幣』は、実質的に官僚たちによって発明されたものであり、その目的は貯蔵資材の

動きを（ママ）管理とさまざまな部門間での物資のやりとりの差配だったのである。」  
この見解の当否について検討しよう。

## 2. 都市成立以前の古代メソポタミア文明の概要

### （1）各地域の時代と文明の区分

南メソポタミア	前 5300年～3500年	ウバイド期
	前 3500年～3100年	ウルク期
	前 3100年	ジェムデット・ナスル期
	前 2800年	シュメル初期王朝時代
	前 1792年	ハンムラビ王即位
アラビア半島湾岸	前 4500年	ウバイド系文化
	前 3000年	ハフィート文化
	前 2800年	ウンム・シ＝ナール文化
スシアナ	前 4500年	チョーガ・ミーシュ
	前 4000年	スーサⅠ
	前 3500年	スーサⅡ

前 5000 紀 灌漑技術の導入

1000 人ほどの集落の形成

前 3300 年頃ウルクで最初の都市が出現

ウルク・ワールド・システム：都市建設の伝播

前 3100 年 システムの崩壊とジェムデット・ナスル期

前 2800 年頃 シュメル初期王朝時代

前 1792 年 ハンムラビ王即位

（注）ウバイド期は 1800 年という長期にわたるが、都市成立のウルク期は 400 年である。  
激動の時代であったことがうかがえる。

### （2）都市以前の集落のイメージ

本稿では、都市成立以前の古代メソポタミア文明を扱う。まずその集落のイメージについて中央公論新社、『世界の歴史』1、人類の起源と古代オリエント、から紹介しておこう。

「紀元前 5000 年ころ、ティグリス川上流の平野部にサマラ文化が広まっていた。イラク東部のザグロスの山麓部のチョガ・マミという遺跡は 6 ヘクタールの面積に集落が構成され、1000 人ほどの人口をかかえていたと推定されている。二種のコムギと二種のオオムギ、亜麻を栽培し、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタ、イヌを飼育していた。

サマラ文化の西にはハラフ文化が広まっており、美しい彩色土器を作っていた。

こうした山麓部の発展が著しいころ、一部の農耕民が南部メソポタミアの平野に進出をはじめた。この進出によって成立した文化をウバイド文化という。」（『世界の歴史』1、90～1 頁）

ウバイド期は前 5300 年から前 3500 年の長い期間で 4 期に区分されるが、人口が増える  
と新しい集落を構えることが多くなったと考えられ、都市の成立はなかった。前 5000 年紀（前  
5000 年～前 4001 年）に灌漑技術が導入され、前 3500 年頃には土器は轆轤で作られるよう  
になった。このウバイド文化は突然新しい様式の土器にとって代わられ、ウルク期が始ま  
る。

前 3500 年から前 3100 年までがウルク期であり、この時期に都市が誕生する。前 3300 年  
頃と推定されている。本稿が扱う時代は、都市成立までである。

### 3. 都市の起源

グレーバーの古代メソポタミア論は都市国家を素材としている。しかし、都市国家が形成される以前から、都市化の動きがあり、共同体間での交易が盛んになされていたはずである。もちろん前 3200 年より前の、文字以前の時代になるわけだから、発掘による検証による外はない。

小泉龍人はその著『都市の起源』（講談社選書メチエ、2016 年）で都市の成立過程について研究している。序章 二つの「世界最古」の都市、で小泉はウルクとそのコピー都市「ハブーバ・カピーラ南」をとりあげ、貨幣の起源を考える上で極めて重要な指摘をしている。小泉の都市論について紹介しよう。

まず、都市の成立に関する研究の基本的指標となった、チャイルドの都市革命論について小泉は次の 10 点を挙げている。（『都市の起源』、16～7 頁）

- (1) 大規模集落と人口集住
- (2) 第一次産業以外の職能者（専業の工人・運搬人・商人・役人・神官など）
- (3) 生産余剰の物納
- (4) 社会剰余の集中する神殿などのモニュメント
- (5) 知的労働に専従する支配階級
- (6) 文字記録システム
- (7) 暦や算術・幾何学・天文学
- (8) 芸術的表現
- (9) 奢・品や原材料の長距離交易への依存
- (10) 支配階級に扶養された専業工人

このチャイルド説を踏まえたうえで、小泉は都市の指標を、都市計画、行政機構、祭祀施設の三つとし、三つの指標が全てないものを一般集落、その一部があるものを都市的集落と定義することで、都市の成立過程研究についての仮説としている。

世界最古の都市ウルクは約 5300 年前に誕生したが、都市化はさらに 2000 年ほどさかのぼる。

「約 7000 年前のウバイド期に展開していた一般集落の中から、都市的な性格をもち始めた集落が現れる。約 6000 年前のウルク期になると、都市的な性格の強まった集落が出てきて、約 5300 年前のウルク後期に都市が誕生する。」（同書、21 頁）

ウバイド期の社会を特徴づけているのが祭祀儀礼の遺跡からは社会的格差は認められないという。ウバイド期の文化は突然途絶え、代わってウルク期と時代区分されるが、このウルク期での都市の誕生について、小泉は独特の説を唱えている。

「都市化の後半段階（ウルク期）になると、余剰食料を豊富に抱える魅力的な集落に『よそ者』が現れることで、多様な変化が起きはじめる。」（同書、22 頁）

小泉の都市成立論は、一般集落や都市的集落が自生的に都市となったのではなく、当時の気候変動による温暖化で、海岸線の後退により、海辺に住んでいた人々が移住を迫られ、都市的集落であったウルクに「よそ者」として混住しはじめたことによるとみている。ウバイド終末期（約 6200 年前）に始まる人の移動に触発されて、街並みに変化してきているのが確認でき、ウルク期に本格的な都市化がみられる、という（同書、70 頁）。

「ペルシャ湾の海進により、シュメール地方に広がるメソポタミア低地の耕作地で冠水や灌漑排水の脱塩機能の低下が引き起こされて、次第に耕作地が放棄されていった。その結果、沖積低地で生活していた人々が移住せざるをえなくなり、約 6000 年前に『よそ者』が発生して、余剰食糧に溢れた集落へ惹きつけられていった。こうした人の動きが主な刺激となって、特定の集落で本格的な都市化が進行していった、というのが自説である。」（同書、74 頁）

さて、このような都市の成立論に加え、コピー都市の問題に移ろう。小泉は、ウルクに

成立した都市国家とほとんど同時期に、ユーフラテス川を 900 キロメートルも遡った川上にコピー都市「ハブーバ・カビーラ南」を創ったのは銀の開発があったからだとみている。「ハブーバ・カビーラ南」は銀山にアクセスしやすい立地にあり、かつ出来あがった銀製品を都市ウルクに運ぶ水路があるのだ。

「銀の重要性は、約 5000 年前の青銅器時代になると際立ってくる。シュメール地方のウル遺跡で出土した粘土板文書には『銀の倉庫』という記述が残され、テル・アグラブ遺跡の神殿では未完成品も含めた銀製品が保管されている。メソポタミア地方では、青銅器初頭までに都市的集落が続々と都市へ成長していき、都市とよべる主要な政体が 20 前後に急増して互いに競合するようになる。実効支配領域を主張する都市国家の出現である。

都市国家の分立段階である約 5100～4300 年前において、すでに銀の価値が認められて、物々交換の場面で銀の重さが基準となりはじめていたことがわかっている。約 4300 年前には、メソポタミアの都市国家群がアッカド王朝によって統一される。この領域国家の段階になると、銀の重さ『シェケル』が取引における基準として定着して、『銀のリング・インゴット』が最古級の貨幣として一部で使用されていく。

私は、ウルク後期のハブーバ・カビーラ南は、銀の開発と輸送のために計画的につくられた都市であると考えている。・・・都市の誕生、都市国家の分立、領域国家への統一という古代西アジアの都市のあゆみは、銀との出会いによってその方向性が決まったといえる。古代西アジアにおいて銀と都市は不可分の関係にあり、銀の所有は権力の掌握に直結していたのである。」(同書、26 頁)

銀のリング・インゴットの使い道については諸説があるようだが、共同体間で銀が価値尺度として使用され、銀が世界貨幣として成立している状況がうかがえる。次に都市成立前後のメソポタミアを取り巻く交易路の状況を後藤健の著書『メソポタミアとインダスのあいだ』(筑摩選書、2015 年)から紹介しよう。

#### 4. 都市成立前後の交易路

##### (1) 後藤説の概要

まず、考古学で使われる、千年紀について、確認しておこう。時代が正確には判明しない古代に関して、千年単位で時代を区切るのので、前四千年紀とは、前 4000 年から前 3001 年までをさす。またあまり使われないが、21 世紀は、三千年紀となる。

後藤の問題意識は、従来四大文明がそれぞれ単独で研究され、その周辺の文明や、四大文明のあいだの交易について研究されていない、ということへの疑問にある。

「過去の研究の多くは、古代文明の起源を、灌漑農耕による生産性の飛躍的な向上、それによって生まれた余剰の蓄積、それを可能とした労働力の集中と社会的・政治的ヒエラルキーの確立などの面から、説明することが多かった。これらは文明の成立過程をその地域社会に特有の歴史的事象として大きな矛盾なく説明しているかのように見える。しかし何ゆえ文明すなわち都市社会がこの地に興らざるをえなかったのかという必然性、なんのために都市のヒエラルキーは作られたのかという目的について、十分な説明とはなっていないように思われたのだ。」(後藤健『メソポタミアとインダスのあいだ』筑摩選書、12 頁)

このような問題意識に立って、後藤はメソポタミアにおける都市成立前後の時期の交易網について、遺跡から出土した土器などの研究から解明しようとしている。

「メソポタミアにおいては、文明成立の段階、いやそれより少し前の段階においてすら、遠隔地産の物資が既に存在していたという事実がある。・・・文明成立に前後する時期に銅製品や金、ラピスラズリのような遠隔地産物資が出現する事実は、この文明の起源を域外との強い関係で説明する必要を感じさせる。文明の起源はメソポタミアの域外、それも相当遠隔地まで含めた広域の情勢を視野に入れなければ、説明することができないのだ。」(同書、12～3 頁)

周知のように都市が発生したメソポタミア南部には、灌漑農耕と牧畜と粘土しかなく、



都市に必要な木材、石材、さらに銅、錫のような卑金属、さらに支配者にとって必要な貴金属、宝石類は産出しない。

「メソポタミアにおける農耕社会の生産物は多くが食料と衣料である。この地域、とくに南部においては、それ以外の産物は存在しない。都市の支配者は何ゆえ自家の必要を超える農業生産物を集め、蓄積しなければならなかったのか。域内で入手不能な遠隔地産の必要物資を入手するための代価として生産を促したのではないか。その取引相手とはだれか。メソポタミアにはない都市の必要物資を保有し、かつメソポタミアが見返りに用意する農産物を必要とする者がその相手である。メソポタミアが文明であるためには、その遠隔地産物資の供給者が存在し、かつ交渉相手となりうるだけの文明度を具えていたに違いない。蛮族が相手では、交渉は不可能だからだ。現在知られるメソポタミア最古の文書の中には、イラン高原とアラビア湾方面からの物資供給が記されている。これらの二方面こそが、初期のメソポタミア文明を支えた遠隔地物資の主要な供給路であった。」(同書、13頁)

このように後藤は、イラン高原とアラビア湾岸の二方面の交易路を解明しようとしている。その際に交易路に繋がるネットワーク的な集落をいくつかの文明として考察している。

「文書の断片的記事から察して、域外からの遠隔地産物資をもたらしたのは、メソポタミアに属さない域外の人々であったと考えるのが自然だ。彼らは陸路にしろ海路にしろ、遠隔地の産物をメソポタミアに供給するという、メソポタミア人にならぬ能力をもっていたことは確かであり、かつ必要物資の安定供給ということが求められたはずであるから、メソポタミアの農耕社会を補完するものとして、当時からある程度完成度の高い社会をなしていたものと想像される。前三千年紀から前二千年紀初頭までの期間、さらにそれ以降も、メソポタミアの支配者たちは、交易や略奪のための遠征などを含む、これらの域外勢力との和戦両面での関係が続いている。

メソポタミアの東に接するイラン高原は世界有数の大乾燥地帯として知られている。石器時代以来、ここではスポット的な農耕社会は存在したが、一般に可耕地は乏しく、その語の歴史の大半を通じて、メソポタミアのように大人口を養うようなものではなかった。農耕よりも、牧畜の比重がはるかに大きい、半遊牧、遊牧社会だった。湾の対岸にあるアラビア半島東部も可耕地はイラン高原以上に乏しく、石器時代以来、内陸では遊牧社会、海岸部では漁労社会が存在していた。」(14頁)

アラビア側についてはかなりの情報があるが、イラン側の海岸部の古代遺跡については情報がほとんどない、としつつも、後藤はネットワークを文明として解明する努力が続けている。その際に、交易路がもたらした製品の確定が肝心である。まず、銅についてはどうか。

「イラン高原とアラビア半島の湾岸部という二つの地域に共通するのは、メソポタミアに存在しない必要物資を自前で確保するか、あるいはより遠方の地域から調達し、それを必要とする消費者に供給することができるという利点であった。・・・古代メソポタミア文明の『泣き所』、すなわち必要であるのに自前では調達できないものを、いくつか挙げてみよう。まず金属がある。銅は人類が最初に利用した卑金属である。メソポタミアから比較的近い銅鉱脈は、イラン高原とオマーン半島に分布する。またアナトリア(現在のトルコ。小アジアとも)、地中海東部に浮かぶキュプロス島(アラシアとも)、アジアとアフリカとつなぐシナイ半島なども銅を産する地域ではある。・・・この中で、メソポタミア文明がその最初期から最も長い年月にわたって、銅とその加工品の輸入を続けた相手の一つが湾岸の勢力であり、原材料の原産地はオマーン半島であると考えられている。」(15頁)

このように後藤は、銅は初期にはオマーン半島から海路で運ばれたとみている。

「当たり前なことだが、古代においては、鉱石にしろ加工品にしろ、銅のような重量物を遠隔地へ輸送するのに、陸路は適していない。オマーン半島の銅は海路でアラビア湾奥へ向かい、ウル、エリドゥ、ウルクなどといったメソポタミア最南部の都市群に配送された。」(同書、16頁)

しかし、前 2000 年頃以降はユーフラテス川の開発で、アナトリアやキュプロスの銅も利用されるようになる。また、木材・石材も海路と河川で運ばれた。では金・銀のような貴金属や宝石類はどうか。

「金・銀のような貴金属、これはイラン高原から、あるいはイランを經由してさらに東方からもたらされた。次に宝石・貴石がある。代表的なものとして、ラピスラズリ、瑪瑙、紅玉髓、真珠、孔雀石、象牙がある。・・・メソポタミア南部へ、前二者はイラン方面から、後三者は湾岸方面からもたらされた。」(同書、16～7 頁)

このようにメソポタミア南部での都市建設に必要な不可欠な製品の交易ルートを探っていくと、たんにメソポタミア文明に限定することはできないと後藤は主張している。

「イラン高原と湾岸だけでなく、それらの延長にある中央アジアやインダス河流域における古代文明の興亡をも視野に入れざるをえない。」(同書、17 頁)

このような概要を踏まえ、貨幣の歴史的生成の解明に必要な限りで、後藤説を紹介していこう。

## (2) アラビア湾岸ルート——「ウバイド系文化」とウバイド文化の崩壊

後藤によれば、都市が形成されたウルク期の前のウバイド期の人々は交易に携わっていて、アラビア湾岸の遺跡でウバイド式土器が発見されるという。

「文明成立の『前夜』にあたる時期のメソポタミアで栄えた農耕文化はウバイド文化と呼ばれる。前 6000 年頃に始まり、前 5 千年紀になると灌漑技術が導入された。そして主としてユーフラテス河の河水をコントロールして、高い生産性を実現するようになった。また集落も発達し、規模・内容が都市に近いものも現れるようになった。ウバイド式土器はこの文化に特徴的な遺物で、回転台で作られ、無紋の粗製土器と精製彩文土器とがある。

このメソポタミア製のウバイド式彩文土器が湾岸の『新石器文化』の遺跡で出土する例がある。そのような文化、遺跡を、筆者は『ウバイド系文化』、『ウバイド系遺跡』と呼んでいる。」(同書、24～5 頁)

後藤が名付けた「ウバイド系遺跡」は、「現在湾岸で知られているウバイド系遺跡の総数は 50 ヶ所ほど」(同書、25 頁)であり、また他方で、「メソポタミアにおけるウバイド文化には、金属・貴金属や宝石・貴石などの遠隔地産物資がすでに存在した。ウバイド人の中には、そのような物資調達業務に携わった人々もいたに違いない。」(同書、28 頁)

ところがウバイド文化は突然崩壊する。

「前 4000 年頃、メソポタミアにおけるウバイド社会は突然として解体し、まもなく、以前とは異なる文化内容をもったウルク文化が成立した。それが新たな住民の到来によるものかどうかは、まだ明らかでない。ウルク期が後半にさしかかる前 3600 年頃、メソポタミアの南部ではウルク、北部ではテペ・ガウラのような最初の都市が形成された。最大都市ウルクの面積は 70～100 ヘクタールあり、それに次ぐ規模の都市集落も南部を中心に相当数形成された。長い準備期間が終わり、人類は新しい時代、都市文明の時代を迎えた。

ウルク期には金属製品の使用が知られている。ウバイド期の末にも、銅や金製品がまれに見られたが、ウルク期になると、銅・金・銀製品が一般化する。前代に細々と始まっていた域外からの物資搬入が、都市文明の成立と同時に恒常化・組織化するのである。最初の文字書法、古拙ウルク文字による表記が始まるのも、ウルク後期においてである。そこで文献史学では『元文字期』という時代名を使用している。」(同書、32 頁)

ウバイド期の人々が自ら交易に従事したのとは異なり、ウルク期では都市が成立することで、都市モデルがメソポタミアの集落に普及していく過程が起きた。ウルク文化の大拡張として知られるこの事態は、キレルモ・アルガゼによって「ウルク・ワールド・システム論」としてまとめられた。後藤はその説を次のように紹介している。

「最初にウルクは (A) メソポタミアの東に隣接するエラム地方に植民をおこない、東方に広がるイラン高原からの物資輸送ルートの確保を図った。次の段階で、ウルクは (B) ティグリス、ユーフラテス両河の上流に植民を開始し、小規模な拠点を設置した。さらにウ

ルクは (C) 特にユーフラテス河上流の開発を続け、シリア、アナトリアにおいて、ウルク文化をもつ大規模植民都市を設置した。最後の段階で、ウルクは (D) 北メソポタミアや西南イランに拠点を設置し、そこを経由する輸送ルートの確保を図った。」(同書、33 頁)

このウルク期の状況は今回は取り上げない。ウルク期以前のイラン高原ルートの状況をみてみよう。

### (3) イラン高原ルート

後藤はイラン高原ルートの解明をスーサの発掘から跡付けている。

「スーサの位置づけはきわめて重要である。それはカルヘ川に並行して流れるシャウル川の左岸に位置する大遺丘群で、ここでは前 5 千年紀末から後 13 世紀までの居住が営まれた。」(同書、38 頁)

スーサのⅠ期とは、前 5 千年紀後半から前 4 千年紀前半であり、メソポタミアのウバイド期にあたる。

「Ⅰ期の後半では多数のスタンプ印章が出土しており、その型式も変化に富んでいるので、前 4 千年紀前半のスーサには、他地域と交流のあるエラムの中心的都市が存在していたことになる。」(同書、39 頁)

スタンプ印章とは契約のために使用されたもので、たとえば交易する商品を入れた袋や容器などを粘土で封印するために使用されたようだ。さらに遺跡からわかることは、銅冶金の遺物があることだ。

「この時期のエラム(スシアナ)とファールスの両地方では銅冶金が開始されており、その点のみを取り上げれば、イラン西南部はメソポタミア南部よりも文化的に進んでいたことになる。」(後藤、39 頁)

ところで、スーサⅡ期は、「メソポタミア南部におけるウルク期と並行し、前 3500 年～前 3500 年と考えられている。」(同書、39 頁) この時期になると、土器のメソポタミア化が起きている。先に見たウルクの拡大期にあたる。

「湾岸にはないが、エラムのスーサにはあるウルク文化拡張の痕跡、それはウルク国家への物資供給ルートが、まずはイラン方面で始まったことを示している。・・・イラン高原からメソポタミア南部への物資の供給路は、地勢状の制約により、スーサを経由することがどうしても必要だった。したがってⅡ期の住民が誰であれ、物資の集積地であったことに変わりはない。」(40 頁)

ところがⅡ期のウルク化はⅢ期(前 3100 年～前 2900 年)になると非メソポタミア化していく。メソポタミアのジェムデッド・ナスル期すなわち原文字期後半に並行し、スーサでも、原エラム文書が発見されている。後藤は文書の性格について次のように述べている。

「メソポタミアでもイラン高原も、ほぼ同じ頃に文字による記録というものが必要な時代を迎えたということである。もちろんそれは偶然ではない。

スーサでもメソポタミアでも、粘土板文書の前身は、立体的計量記録用具、ブツラとトークンにあると考えられている。ブツラとは内部に軽量対象の模型(トークン)を封じ込んだ、手のひらに乗るほどの中空の粘土球で、まだ柔らかいうちに外表面に内容物を表す記号が刻まれる。物資の取引契約などを行う際に、実物に代わる象徴として使用されたもので、これは粘土板文書の起源と考えられている。初めのうち粘土板には絵文字が書かれたが、短期間の後、楔形文字へと変化したことが広く知られている。・・・原エラム文書に見られる計量システムには、メソポタミアにはない十進法が含まれるという。」(同書、41 頁)

この時代は、ハンムラビ法典の時代にさかのぼること 1000 年前後である。この時代における最初の文字使用の必要性が、交易における物資の取引契約から始まったのではないかという推測は頷かされる。

「この原エラム文書の地理的分布は、前 3000 年前後のイラン高原に、スーサを中心とする都市群のネットワークが存在したことを物語っている。これがイラン高原における史上

最初の都市文明、『原エラム文明』である。それは同時期、すなわちジェムデッド・ナスル期のメソポタミアをカウンターパートとするイラン国家である。そのネットワークは、かつてのウルクによる遠隔地物資獲得のためのネットワーク、すなわち『ウルク・ワールド・システム』の一部を前身とするものであったかもしれないが、それを支配したのはメソポタミア人ではなく、原エラム語を母語とするイラン高原の住民であったことが、大事な点である。前代のウルクによるネットワーク（ワールド・システム）は土着の文化に大きな影響を及ぼし、イラン高原で最初の都市文明を創出させたのだ。

ところが、イラン系住民によるスーサの支配力は、ⅢB期には早くも低下を始めたと思われる、メソポタミア色が復活する。メソポタミアのシュメル初期王朝時代Ⅰ期の土器が主体を占めるようになり、原エラム文書は減少する。このことは原エラム文明の衰退と理解してよいだろう。」（同書、42頁）

このようにイラン高原ルートは、スーサを中心とする交易のネットワークが、ウルクにおける都市の成立後、イラン高原の集落の都市化を招きよせ、都市化による交易の発達は、記録のための文字の使用にいたっていることが示された。

#### （４）アラビア湾岸ルートのその後——「ハフト期」

後藤によれば、ウバイド人と違ってメソポタミア人は海上ルートは苦手だった。しかし、オマーン半島ハフト遺跡でメソポタミアの土器が出土した。後藤はこの時期をハフト期と呼び前3100～前2800年と推測している。そこでの問題は、ハフト人とはだれか、ということである。後藤は次のように推測している。

「前4千年紀の末に、イラン東南部の土器の伝統が無土器時代のオマーン半島に突然移植され、その土地の伝統が始まったのだと思われる。自然な解釈をするならば、前3100年頃に、イラン東南部の原エラム都市テペ・ヤヒヤが、オマーン半島を自国領土に編入し、移民を送り込んだのだ。それは原エラム時代のヤヒヤ国家による『植民』にほかならない。目的は銅山の開発であり、移民の中には鉱山技師や土器作りの職人、それに多少の農民もいたであろう。」（同書、58頁）

アラビア湾はオマーン半島で対岸のイランと最短距離となっていて、植民は可能である。

「テペ・ヤヒヤの支配者が、銅山開発のためにオマーン半島を植民地化した結果、同半島と湾岸は事実上原エラム文明の一部と化し、メソポタミア、イラン高原の含む大経済圏に取り込まれた。しかし本来ヤヒヤの支配者が海を隔てたオマーン半島に埋蔵される地下資源の事情を知る可能性はない。専門家を派遣して調査をくり返させた結果に違いない。そうであれば、原エラム文明は、別の遠隔地にもさまざまな専門家を派遣して資源調査を行っていた可能性がある。」（同書、59頁）

もともと人類はアフリカで誕生し、それが世界に拡散していった。だから国境に縛られた現代人と異なって、移住はお手のものであったに違いなく、また自然の観察とその利用によってレヴィストロースのいう「野生の思考」を身に着けた博学者だった。銅山が開発されれば同じような地勢を探して新しい鉱脈を発見することなどたやすいことだったのである。

この植民は、海上ルートの開発につながった。ハリージーと呼ばれている人々とは、後藤によれば、漁民の交易民化であった。古代の交易民について後藤は次のように述べている。

「外国語、交渉術、算術、国際経済に関する知識……。おそらくそれはイラン高原の交易民の得意分野であり、両者の協力あるいは競合が、最初のハリージーを生み出した可能性がある。」（同書、63頁）

後藤は湾岸での交易を創り出した文明をウナム・ン＝ナル文明と名付けその成立について考察している。

「それでは、ウナム・ン＝ナル文化は、いかなる契機によって文明の時代を迎えたのだろうか？それは前三千年紀中ごろの、イランやインダス河流域を含む広域の情勢におい

で説明されるだろう。とりわけ重要であるのは、アラビア湾内における海上の交易ルートが発達し、陸上の交易ネットワークとリンクしたこと、そしてインダス文明の成立に伴い、湾内からインダス河口にいたる新しい海上ルートが開発されたことである。」(同書、111頁)

前 4500 年頃成立していた湾岸の集落遺跡からのウバイド期の土器、それから 1500 年後に、イランのエラム文明都市がオマーン半島を植民化し、それによって海上ルートはインダス河にまで広がったという。

「ウム・ン＝ナール文明はオマーン半島の銅を採掘し、初期の加工を行った後に、製品を遠隔地へ送り出すという目的でオマーン半島に作られた文明である。この地域には、他地域に対する銅製品の供給という、ハフト期以来の伝統があった。そしてインダス文明の成立後は、メソポタミア、トランス・エラム、インダスという三つの文明、少なくとも三つの世界のハブと化したことがここでもわかる。」(同書、139頁)

このように、都市成立のはるか以前のウバイド期から、イラン高原ルートとアラビア湾岸ルートとの二つの交易路が成立しており、共同体間の国際交易がなされており、都市の成立はこの交易を一層盛んにしていったのだ。

## 第2章 世界貨幣の生成

### 1. 楊枝嗣朗のイマジナリー貨幣論

#### (1) 貨幣起源論でのグレーバー説との一致

ところで日本の研究者では、楊枝嗣朗がその著『歴史のなかの貨幣』(文眞堂、2012年)で、グレーバーの研究に先立って、リーマンショックの以前に、古代メソポタミアの経済の研究に基づく欧米の研究者たちの学説を紹介し、貨幣の起源を商品交換ではなくて信用に求める見解を発表している。この書にまとめられる以前に、2003年から学会誌『佐賀大学経済論集』などに公表された諸論文を読んでいたおかげで、私は古代メソポタミアの研究の視点をそれなりに絞ることができ、いつかそれをまとめることを考えていた。というわけで次に楊枝嗣朗の研究を紹介しておこう。

楊枝嗣朗はマルクス貨幣・信用論を踏まえて現代の信用制度研究をめざした研究者であり、学会では異端とみられる大胆な説を実証的に展開してきた。私はイギリス産業革命前後には商業手形の流通はまれであって、主流は内国為替手形であった、というその説に眼を開かれ、自分が得意技としている『資本論』第三巻信用論のマルクスの草稿と現行版の対比を試みて、マルクスが為替手形と書いているところをエンゲルスが商業手形に変更していることを論じたことがあった(『佐賀大学経済論集』47巻5号所収「書評楊枝嗣朗著『近代初期イギリス金融革命』の意義」)。そういうこともあって、楊枝の論文の検討は続けてきたが、『歴史のなかの貨幣』に関してはまとまった批評はできてはいなかった。なによりも考古学的知見を欠いていたからだ。

ところがグレーバー『負債論』の貨幣起源論と楊枝のそれとは一致している。多分、グレーバーが依拠している欧米の研究者の論文と楊枝が検討したそれとが重なっており、貨幣の起源にかんしては、結果として同じ結論が出されたのではないかと想像できる。

#### (2) 楊枝の貨幣起源論

楊枝は欧米学者の説を丹念に紹介しながら、自説をまとめている。その際に、貨幣は商品交換から発生したのではなく、信用関係の記述の必要性から発生した、という説を肯定的に評価し、次のように述べている。

「貨幣は古代共同体間の商品交換から生まれたものではなく、古代の都市国家や神殿の家産的経済における経済計算の必要から、債務を記録する抽象的な計算貨幣として生まれたと見られる。そこでは、流通鑄貨は必要とされず、数千年に亘って、コインは存在しなかった。」(『歴史のなかの貨幣』、146頁)

また古代の神殿を銀行に見立てた議論の紹介もある。

「預金の中心は穀物であったが、その他、農産物、家畜、農業器具、さらには貴金属等も預けられ、銀行業は、その安全性のため民間個人より宮廷や寺院によって営まれることが多く、楔形文字で書かれた粘土板の預金受領書は、徐々に第三者に譲渡されるようになった。」(同署、149頁)

「すべての貸付は役人の面前での書式による契約が必要で、債務の担保には、土地、動産、債務者本人や妻、愛人、子供、奴隷などが供され、債務のための人的隷属は3年までに限定されていた。」(同署、149頁)

楊枝の説の展開はマルクスの貨幣論を踏まえ、それをさらにイマジナリー貨幣論へと進化させることで現代の信用制度の解明にむかおうという問題意識があり、グレーバーと問題意識を共有しつつも、経済学の素地がある分、ここで紹介しておく価値があろう。続けて引用をしておこう。

「尺度としての貨幣は歴史的には商品交換取引に先行して存在し、貸付取引から生成した。すなわちそのようにして生成した(計算)貨幣によって貸付取引が建値されていたのである。貨幣の生成は商品取引の存在以前に見られたという事実は、従来の交換から貨幣が生まれるという常識を覆すのみならず、貨幣論の構成を一変させる。」(150頁)

「他の古代都市の重量基準も同様に、小麦や大麦の重量を基準に作られていた。これが計算貨幣に転用された。」(150頁)

「尺度としての貨幣、すなわち、計算貨幣単位や等価の生成は、商品交換とは別の根拠に基づいていたと考えざるを得ないであろう。」(154頁)

「そこでは、計算貨幣単位で表現される価格や利子も、市場取引を目的とするものではなく、行政的なオフィシャルなものであって、租税債務の計算、生産、在庫、食糧・油・労働力等の配給・配分、遠隔地での交換のため臣下(商人)に託された財の債権債務の計算といった神殿や王宮の内部的簿記の目的にかなう性質のものであった。現物での必需品の取得という古代社会の税の徴収と再配分による財の流通、遠隔地との財の交換・交易は、宮廷や神殿におけるインハウスの簿記・計算を必要とした。かくして、計算貨幣は、古代メソポタミア社会の大土地所有者の王宮や神殿が彼らの臣下や従属民との様々な債権債務関係の展開と記録の必要から生成したのである。」(157頁)

「まさに貨幣(計算貨幣、価値尺度)は、市場的商品交換取引の中から発生したのではなかったのである。そして、計算貨幣の単位には大麦や銀の重量名が選ばれたが、計算貨幣の価値は、大麦や銀の価値に規定されてはいなかった。」(157~8頁)

「(ハインゾーン&シュタイガーやレイ等は)神殿は利子の一部を受け取り、さらには現物での穀物や家畜、金属等の預託を引き受けるようになることで、預金銀行に転化する。・・・計算貨幣に使われる穀物そのものが交換手段のような貨幣になったのではなく、ただ、穀物の一定重量が計算貨幣として尺度に使われているだけである。・・・こうした貨幣は、『貸借を通じて創造される』ところの信用貨幣だという。」(159頁)

商品交換から貨幣が生成するというスミス説への批判として、信用に貨幣の起源を求める両者の説での相違点は、グレーバーが貨幣が商品であるか、信用であるかという研究者間の対立のどちら側に立つかという選択において、双方だという立場であるのに対して、楊枝は信用の側に立っている点である。

### (3) イマジナリー貨幣論の展開

では楊枝のイマジナリー貨幣論による貨幣論の再興とはどのようなイメージであろうか。簡単に紹介しておこう。楊枝は商品貨幣論者は、鑄貨を価値尺度とみなしているが、現実には鑄貨は価値尺度として機能しておらず、価値尺度はイマジナリー(観念的)なものであるということを強調している。それ自体は正しいのであるが、そこから信用制度における信用の貨幣機能、つまり信用貨幣の特徴と結びつけて次のように述べている。

「かくして、鑄貨の価値が内在的なものでなく、外在的であり、貨幣は債務=信用であ

るという認識と結びつくことによって、はじめて、『商品貨幣』金の物理的制約にとらわれることなく、取引需要に応じて無限に拡大する資本主義的貨幣の本質に接近できるのである。」(同書、168頁)

このような見地から、今日の経済危機の特徴について次のように述べている。

「それゆえ、信用関係に一旦、危機が発生すれば、貨幣供給は急激に収縮せざるを得ず、流動性の危機が発生する。流動性の最後の供給者である中央銀行の機能が前面に出てくることになる。グローバル化と自由化以来、中央銀行の独立性が強調されてはいても、バブル崩壊後の1990年代の金融危機で見られたように、中央銀行の最後の貸し手機能も、国家財政を背景にもたずしては金融危機は十分には対処できないのである。金融システムの危機に際しては、中央銀行の流動性の供給だけでは対処できず、国家による公的資金の投入が求められる場合もある。このような中央銀行の最後の貸し手機能や国家介入は、後論のように、貨幣と国家の関係に由来する。そして、それはまた、貨幣発展の歴史的パースペクティブを明示するものでもある。貨幣の抽象性と債務性という特質をもつ資本主義的貨幣の生成が、貨幣の歴史において、どのような意味をもっていたのであろうか。」(同書、169頁)

これはリーマンショック以前の分析だとは言え、楽観的過ぎるように思われる。リーマンショックでグリーンスパンは金本位制への回帰も一つの選択だと発言している(田中宇『金融世界大戦』朝日新聞出版、27頁)。価値尺度としての貨幣の観念性は正しいが、だからといって金が貨幣ではないという金廃貨論は、実務家のとるところではない。金廃貨論批判はすでに検討してきたのでここでは述べないが、それを歴史的な貨幣生成論にまで適用しているなら間違いを犯すであろう。

## 2. 世界貨幣の生成

### (1) 作業仮設

グレーバーの古代メソポタミア経済の分析は、外国貿易(都市国家間、あるいは遊牧民と都市国家のあいだの取引)をみていない。銀は世界貨幣として創造され、それが共同体内部では、計算貨幣として価値尺度に利用されていた。そして、世界貨幣の成立に1000年以上遅れて成立した都市国家においても価値尺度(計算貨幣)として利用されたのであり、都市国家が計算貨幣を作ったわけではない。楊枝も共同体間の取引を頭から否定して、都市成立の以前に成立していた共同体間交易を考慮していない。

グレーバーは商品貨幣か信用貨幣か、という対立に対して、貨幣は双方だとみている。これに対して楊枝は、商品から貨幣の生成を否定し、労働価値も否定して、イマジナリー貨幣論を打ち立てようとした。もともと価値形態は超感性的なものであり、人が目にすることができる外観は幻影的形態である。古代メソポタミアにおける世界貨幣銀の成立は、複数の共同体同士の関係における物財の交換が複数の一般的等価物を生成させ、それが貴金属へと固定化された結果である。

まず貨幣は世界貨幣として出現した。それはシンボルではなく、共同体間の商品交換の進展の帰結である。それが、市場の未発達な共同体や都市国家に反作用して、世界貨幣が価値尺度として機能し、シンボルとして認識されるようになった。古代メソポタミアの都市国家では市場は未発達で、個々の商品の価値は国家によって、国際価格を基準とした公定価格として表現されていた。ハンムラビ法典で顕著なのは、損害賠償の金額である。現実の商品交換よりも、こちらのほうがメインであったようだ。この点についてはグレーバーの人間関係の調整役としての貨幣、という見方は正しいだろう。

### (2) マルクスの貨幣起源論

マルクス『資本論』には次の記述がある。

「商品交換は、共同体の終わるところで、共同体がほかの共同体と・またはほかの共同

体の成員と・接触するところで、はじまる。ところが物がひとたび対外的共同生活において商品となるや否や、それは反動的に、内部的共同生活においても商品となる。それらの物の量的な交換関係は最初にはまったく偶然的である。それらの物が交換されうるものであるのは、それらを相互に譲渡しあおうとする、それらの物の所有者たちの意志行為によってである。かれこれするうちに、他人の使用対象にたいする欲望が次第に確立される。交換のたえざる反復は、それを規則正しい社会的過程たらしめる。だから、時の経過につれて、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換の目的で生産されざるをえない。この瞬間から、一方では、直接的要求にたいする物の有用性と、交換のための物の有用性とのあいだの、分離が確立される。諸物の使用価値が、それらの物の交換価値から分離する。他方では、それらの物が交換されあう量的関係は、それらの生産そのものに依存するようになる。慣習は、それらの物を、価値の大きさとして固定させる。

直接的な生産物交換においては、どの商品も、その所有者にとっては直接的に交換手段であり、その非所有者にとっては等価であるが、そうであるのは、その商品がその非所有者にとって使用価値たるかぎりにおいてのみである。だから、交換財貨は、それら自身の使用価値・または交換者の個人的欲望・から独立する何らの価値形態もまだ受けとらない。こうした形態の必然性は、交換過程に入り込む商品の数と多様性とが増大するにつれて、発展する。課題は、その解決の手段と同時に発生する。商品所有者たちが彼らじしんの財貨を他のさまざまな財貨と交換したり比較したりする交易は、さまざまな商品所有者たちのさまざまな商品が、それらの交易の内部で一個同一の第三の商品種類と交換されかつ価値として比較されることなしには、けっして生じない。こうした第三の商品は、さまざまな他の商品の等価となることによって、直接に——たとえ、狭い限界内において似せよ——一般的な等価形態を受けとる。この一般的な等価形態は、それを生ぜしめた一時的な社会的接触と、その発生および消滅を共にする。それはかわるがわる、かつ暫定的に、あれやこれやの商品に帰属する。だがそれは、商品交換の発展につれて、もっぱら、特殊な商品種類にこびりつく——または貨幣形態に結晶する。どんな商品種類にそれが膠着するかは、さしあたり偶然的である。しかし、だいたいにおいて二つの事情が決定的である。貨幣形態は、内部的諸生産物の交換価値の事実上自然発生的な現象形態たる、最も重要な外部からの輸入財貨に付着するか、さもなければ、内部的な譲渡されうる財産の主要要素たる、たとえば家畜のような使用対象に付着する。遊牧民族が最初に貨幣形態を発展させる。というのは、彼らのすべての財産が、動かせうる・かくして直接に譲渡されうる・形態にあるからである。また彼らの生活様式が、彼らをしてたえず他の共同体と接触させ、かくして諸生産物の交換を行うようにいたらしめるからである。人間は、しばしば、人間そのものを奴隷の姿態で原始的な貨幣材料たらしめたことがあるが、土地をそうしたことはまだない。こうした理念は、ただ、すでに発達した市民社会においてのみ発生しえた。」(『資本論』原書、93～5頁)

楔形文字解読以前の人類学の知見にもとづいたものであるとはいえ、都市成立以前の古代メソポタミアの交易について、妥当する見解であるように思われる。次号では改めて貨幣論を論じてみたい。

### (参考資料)

#### グレーバー『負債論』(以文社)ノート

グレーバーのこの書は大部のものである。しかし読みやすく、論旨は明快である。さらにマルクス『資本論』をはじめ、マルクスの革命理論にも理解がある。なによりも、リーマンショック以降の負債経済の分析のためには不可欠の労作である。



私は、とりあえず、古代人の負債観による、現代人の負債観や制度の欺瞞性の暴露を取り上げて研究課題を提案し、また、貨幣起源論に的を絞って批評したが、それ以外にも多くの論点がある。問題意識を共有するために読書ノートを公開したい。●の部分は私のコメントであり、○は私がつけた内容による小見出しである。

## 第1章 モラルの混乱の経験をめぐって

### 導入部分

1970年代の石油危機、OPEC諸国の富が西側の銀行に流入、それを第三世界の独裁者に貸し付け、1980年代初頭の米国の金融引き締め政策によって金利が20%近くにまで跳ね上がり、1980年代と90年代を通じて第三世界の債務危機を招いた。

「IMFが介入し、再融資と引き換えに、基礎食品の価格維持政策あるいは戦略的食糧備蓄さえも放棄するよう最貧国に要求するにいたったこと。無償の健康保険、無償の教育の放棄もそこにはふくまれていること。そしてこういったことすべてが、地球上で最も貧しく最も脆弱な人びとのための最も基本的な支援の解体をひきおこしたこと。貧困、公共資源略奪、社会の崩壊、暴力の蔓延、栄養失調、絶望、生活破綻についてもわたしは話した。」(5頁)

債務帳消：「これら貧困国の多くが現時点ですでに借用分の3倍から4倍の金額を返済している」(6頁)

負債とは何か「もし歴史の教えというものがあるとしたら、暴力に基盤を置く諸関係を正当化しそれらをモラルで粉飾するためには、負債の言語によってそれらを再構成する以上に有効な方法はないということだ。」(10頁)

「第三世界の債務国は、ほとんど例外なく一度はヨーロッパ諸国によって攻撃され征服されたことのある国々である。そして多くの場合、かつての侵略国に債務を負っている。」(11頁)

### 合衆国の負債の意味

「合衆国の対外債務は、諸外国（ドイツ、日本、韓国、台湾、タイ、湾岸諸国といった）の投資家が所有するTボンド（財務省長期証券）の形態をとっている。そして多くの場合、それらの諸国は合衆国の軍隊によって保護され、赤字財政支出の原因そのものである重装備の米軍基地によって覆われている。・・・中国さえも、非常に多額のTボンドを所有することで、ある程度は合衆国に奉仕させられているのであって、その逆ではないのだ。

では、合衆国財務省に向かって集中をつづける、この貨幣の本質とはなにか？これらは『融資（ローン）』なのか？それとも『貢納』なのか？」(12頁)

### 融資を迫るギャング

「古代世界におけるあらゆる革命運動は単一のプログラムを共有している。『負債を帳消しにし、土地を再分配せよ！』というものだ。」(15頁)

「こうして負債の歴史をながめてみるならば、最初に目につくのが、なによりもまず根深いモラル上の混乱である。ほとんどの場所でほとんどの人間が、(1)借った金を返すということは純粋にモラルの問題であるという考えと、(2)習慣的に金を貸す人間はだれであろうと邪悪であるという考えを共存させていることが、それを最もよく示している。」(16頁)

### 高利貸という悪名

「歴史的に金貸しが汚名を挽回するために効果のある方法は二つしかなかった。第三者に責任を転嫁するか、借り手のほうがはるかに質が悪いと言い張るかである。」(19頁)

### 本書の中心的な問い

「わたしたちのモラルおよび正義の感覚が商取引の言語に還元されるとして、それはいったい何を意味しているのだろうか？モラル上の義務を負債に還元するということは、いったいどういうことなのか？モラル上の義務が負債へと転換するとき、そうしたことについてのわたしたちの語り口はいかようなものなのか？ひとつの水準においては義務と負債

の違いは単純かつ明白である。負債とは一定の額の貨幣を支払う義務のことである。それゆえに負債は、それ以外の義務とは異なり厳密に数量化することができる。このことが負債に単純で冷酷で非人格的なものと化す余地を与えてしまうのであるし、ひるがえって負債を譲渡可能にするのである。」(22～3頁)

「この観点からすると、決定的な要素、つまり以下で詳細に探究されるであろう主題とは、モラルを非人格的な算術に変換し、それによって、さもなくば非道にもあさましくみえるだろう物事を正当化する貨幣の機能である。これまで強調してきた暴力という要因は、それと比べるならば副次的なものにみえるかもしれない。『負債』と純粋なモラル上の義務のあいだの差異は、返済の義務を強いるために、債務者の所有物を押収したり痛めつけられたいかと脅かす武器を携えた男たちがいないかの違いではない。単に、債務者がどれほど負っているのかを数字で特定する手段を有しているということにあるのだ。

しかしながらもう少し詳しくみていくと、暴力と数量化というこれらの二つの要素が密接にむすびついていることがわかる。」(23～4頁)

「暴力あるいは暴力による脅迫がどのように人間関係を数字に変えてしまうのか、本書ではその仕組みがくり返しとりあげられるだろう。これこそが、負債という主題を取り巻くすべての周囲に漂っているモラル上の混乱の源泉なのである。そこから生じるジレンマは文明そのものと同じくらい古い。」(24頁)

リーマンショックの分析

「それは諸国民の命運を左右する負債や貨幣や金融機関の本質についての真に公共的な対話のはじまりでもあったのだ。」(25頁)

「ほとぼりがさめるにしたがって、その多数が念の入った詐欺以外ではないことがあきらかになった。ゆくゆくは債務不履行が不可避になるよう仕組まれたローン契約を貧しい家庭に売りつけるような操作が、その内実だったのだ。」(26頁)

アメリカ人の多数が救うのは銀行ではなくて一般の債務者だと感じたこと、これは債務者に対する同情にかけては厳しいアメリカ人であることを考慮すれば前代未聞。

「合衆国政府は実質的に3兆ドルを緊急救済につきこむ一方、改革にはいっさい手をつけなかった。銀行は救済された。だが、わずかな例外をのぞき、小規模債務者に救済の手がさしのべられることはなかった。」(27頁)

「わたしたちが最初に学ぶことはそもそも仮想貨幣など新しくもなんともないということである。実のところ、それこそが貨幣の原型だったのだから。信用制度や借入証さらには経費勘定さえも、現金よりもはるかに昔から存在していた。こういった事象はほとんど文明とおなじくらい古いのだ。実際、わたしたちのみるところ、地金が支配的な時代——金や銀そのものが貨幣とみなされる——と貨幣が抽象物であり仮想的な計算単位とみなされる時代を往復する傾向を歴史は示している。しかし歴史的にみて先行するのは信用貨幣であり、今日わたしたちが眼にしているのは、中世においては、あるいは古代メソポタミアにおいてすらも、いわずもがなの常識とみなされていたであろうもろもろの想定の外ではない。」(29～30頁)

● 資本がない。近代的信用制度の特徴が踏まえられておらず、それと古代の信用制度を同一視している。ケインズと一緒。

「過去をふりかえるなら、仮想的な信用貨幣の時代は、ほとんど例外なく、事態の混乱を防ぐために考案された制度の創造をともなっている。すなわち、金貸しが官僚や政治家と結託して万人を絞り上げるような事態を阻止することがその目的だったのだ。ただし、わたしたちの信用貨幣の新時代は、それとはちょうど逆向きにはじまっているようにみえる。この時代は、債務者ではなく債権者を保護するために設計された、IMFのようなグローバルな制度の創設とともに開始したのであるから。ただし、わたしたちがここで話題にしている歴史的尺度においては、10年や20年などほんの一瞬に過ぎない。将来なにが起きるのか、わたしたちはほとんどなにもわからないのである。」(30頁)

## 第2章 物々交換の神話

### ○ 1. 物々交換の神話への批判

「ただの義務、すなわち、あるやり方でふるまわねばならないという感覚、あるいはだれかになにかを負っている〔借りがある〕という感覚、それと負債との違いとは、せいぜいかにいえば、なんであろうか？答えは単純だ。貨幣である。負債と義務の違いは、負債が厳密に数量化できることである。このことが貨幣を要請するのである。」(34頁)

- 何かおかしい。古代の貢納性におけるの貸し借り、つまり数量化できる財の貸し借りではなかったのか。この計算はまだ貨幣とは言えない。財が数量化できる、ということは貨幣の価値尺度機能を待たなくてもいい。

物々交換から貨幣が現れ、やがて信用が発展するという神話の批判。

アダム・スミスへの批判。

物々交換が起きるのはよそ者どうし(46頁)人類学的事例が提示されている。日常での交換は、物々交換ではなくて信用による。

エジプトの象形文字、メソポタミアの楔形文字の解読によって、スミスが依拠したホメロス(前800年)から約前3500年へと歴史を押し戻した。紀元前3500年には信用制度があったことが判明した。(60頁)

「楔形文字による記録のほとんどは金融についてのものであって、わたしたちがメソポタミアについて多くの知識を有しているとしたら、そのめぐりあわせゆえにである。

シュメール人の経済は巨大な神殿と宮殿の複合体によって支配されていた。これらの機構は、聖職者や官吏、工房で働く工作者たち、巨大な地所で働く農民や牧羊者たちなどからなる数千人のスタッフを抱えていた。古代シュメールは数多くの独立した都市国家に分かれていたが、前3500年頃、メソポタミア文明の幕が上がるまでには、神殿の管理者たちは、単一の統一された会計業務の体系を発展させていたようだ。ある意味ではこの体系はいまもわたしたちに受けつがれている。というのも、1ダースとか1日24時間といったことをわたしたちはシュメール人に負っているからである。基本的な貨幣単位はシェケルであった。1シェケルの重量の銀は、1グルないし1ブッシェルの大麦と等価とされた。1ミナは60ミナスに分割されたが、1シェケルは一人前的大麦に相当する。これは一カ月は30日ということと神殿の労働者たちへ的大麦の給付は一日二度であることという原則にもとづいていた。この意味における『貨幣』が商業取引の産物ではないことは容易にみとれる。『貨幣』は、実質的に官僚たちによって発明されたものであり、その目的は貯蔵資材の動きを管理とさまざまな部門間での物資のやりとりの差配だったのである。

神殿の官僚たちはこの体系を利用して負債(地代、手数料、貸付金など)を銀で計算していた。銀が貨幣であったのはその結果である。そして銀は未加工の塊として、スミスの表現によると『組成の延べ棒』として流通していた。これについてスミスは正しかったのである。だが、彼の考察で正しかったのはその部分のみである。というのも、そもそも銀の流通量はさほどのものではなかったからである。銀のうちほとんどは、神殿や宮殿の宝物殿にうやうやしく鎮座し、なかには用心深く保管されて、文字通り数千年のあいだおなじ場所にとどまることになった。銀の鑄型を規格化し刻印すること、権威をもって純度を保証するなんらかの制度を創設することはたやすかったはずだ。だがそうする必要を感じた者はいなかった。ひとつの理由は、負債が銀によって計算されていたにせよ、それが銀によって支払われねばならないわけではなかったからである。実際に負債は多かれ少なかれ手元にあるどんなものによっても支払い可能だったのである。神殿や宮殿のあるいはその官吏に借金のある農民たちは、ほとんどの場合、大麦で負債を清算していたようだ。だからこそ銀の大麦に対する比率を固定することがかくも重要だったのである。とはいえ、羊や家具、瑠璃をもってしても、受領に支障はなかった。神殿や宮殿は巨大な産業機構を形成していたのである。だから利用法のないものはほとんどないというわけだ。」

- グレーバーは外国貿易(都市国家間、あるいは遊牧民と都市国家のあいだの取引)をみていない。銀は世界貨幣として創造され、それが共同体としての都市国家において価値

尺度（計算貨幣）として利用されたのであり、都市国家が計算貨幣を作ったわけではない。「メソポタミアの各都市に出現した市場においても、商品価格はやはり銀によって計算されていた。そして神殿や宮殿による統制に完全に服していない商品価格は、需要と供給にしたがって変動する傾向にあった。しかしここでもまた現存する証拠資料の示すところによれば、ほとんどの取引が信用を基盤としていた。取引に銀を実際に使用した数少ない人たちは、商人（神殿のために活動することもあれば自由に活動することもあった）であった。しかし、その彼らでさえも、ほとんどの取引は信用によっておこなっていたのである。ましてや、『エール女』や地元の居酒屋からビールを買うような一般の人びとは、やはりここでツケで飲んで、それから収穫期に大麦だったりあるいは手元にあるものをかき集めて支払っていた。

ここにいたって貨幣の起源にかんする旧来の物語はほとんどあらゆる点で崩壊してしまう。」（60～62頁）

この後イネスからの引用がある。

- イネスについては楊枝嗣朗が紹介している。『歴史の中の貨幣』（文眞堂）。

### 第3章 原初的負債

スミスへの言及がある。

経済学を一つの科学として定立する試み。この場合貨幣の存在ないし不在にまつわる問そのものの重要性が消える。（67頁）

貨幣の国家理論と貨幣の信用理論

信用論者たちの主張：貨幣は商品ではなく計算手段である。貨幣はモノではない。通貨単位とは抽象的な尺度単位に過ぎない。交換手段は代用貨幣（トークン）でいい。

「貨幣が尺度にすぎないなら、それはなにを測定するのか？答えは単純だ。負債である。一枚の硬貨とは実質的に借用証書なのである。」（70頁）

「つまるところ、一枚の金貨はそれ自体でなにかの役に立つことはない。人がそれを受け入れるのは、他のだれもがそうするであろうと想定しているからだ。

この意味において、通貨単位の価値とは、ある対象物の価値の尺度ではなく、ひとが別の人間に寄せる信頼の尺度なのである。」（71頁）

- これはイネスの主張として肯定的に紹介されている。

イネスの議論には混乱がある。使用価値自体も数量化できるということと、価値の数量化とを混同しているのだ。貨幣の価値尺度機能の構造、つまり価値形態が不在だ。

表券主義、ドイツ歴史学派、クナップの貨幣固定学説

「国家が、それによる税金の支払いを受け入れさえすればよい。というのも、なんであろうと国家に受け入れられているものは、当の受け入れられているということによって通貨となるからである。」（73頁）

- 国家が受け入れる前から貨幣はある。原因と結果の取り違え。

金山の国家による支配。

「市場の発生したのが古代の軍隊の周囲においてであることはまったくあきらかである。」（75頁）

マダガスカル の事例

神話を求めて

「なぜ人類学者たちが、単純で説得力ある貨幣の起源の物語を提唱できないかという、そういったものが存在すると信じる根拠がないからである。貨幣は音楽や数字や装身具とおなじように『発明された』ものではない。わたしたちが『貨幣』を呼ぶものはまったくもって『もの』ではない。それは、一つのXは六つのYに相当するというように、物事を割合として数学的に比較する一つの手段なのである。」（78頁）

ケインズ貨幣論の称揚がある。（81頁）

「ここでいわれているのは、国家は必然的に貨幣を創造するというではない。貨幣と

は信用であり私人間の契約上での合意によって存在することができるのであって、国家は合意を執行し法律条項を指令するにすぎない。」(82頁)

● 表券主義に対するケインズの批判の紹介

「貨幣についての国家＝信用理論の真の弱い環は、常に税という要素だった。初期の国家がなぜ税を要求したのかを説明することと、『いかなる権利において?』と問うことはべつのがらである。」(82頁)

「国家＝信用理論をふまえつつ考案された代替的な解釈がある。それは『原初的負債論』と呼ばれ、主としてフランスで、経済学者だけでなく文化人類学者や歴史家、古典学者をもふくむ研究者チームによって展開されている。」(83頁)

○ 2. 原初負債論(アグリエッタら)への批判。これは正しい。

アグリエッタ、オレルアン達への批判。最近では、ブルーノ・テレ

「通貨政策と社会政策を分離しようとするどんな試みも究極的には誤りであるというのが、原初的負債論者たちの核となる主張である。彼らによれば、これらは常に同一のものであった。政府は貨幣創造のために税を使うが、それが可能であるのは、市民全員がおたがいに負っている負債の守り手となるからである。負債こそ社会の本質そのものなのだ。負債は貨幣や市場にはるかに先立って存在しており、貨幣と市場自体はそれをバラバラに切り刻む手段にすぎない。」(84頁)

「当初この意味の負債は国家ではなく宗教を通じて表現された。」(84頁)

「ひとは人間本性にみちびかれて『物々交換』にいたるなどということはない。むしろ人間本性がはっきりと示しているのは、人間は貨幣のような象徴をたえず形成してやまないということである。」(87～8頁)

「税とは端的に、じぶんを形成した社会に対してわたしたちの負う負債の尺度にすぎないというわけである。しかし、このような議論でも、この種の絶対的生の負債がどのようにして貨幣へと換算可能になるのか、はっきり説明されていない。」(89頁)

● テレらは、古代社会の指導者たちの言明に単純に依拠しているように思われる。

「モラル上の義務が特定の金額へと転化するのはいかにしてか?」(89頁)

● これがグレーバーの問だ。

「この種の『原始通貨』が物の売買に使用されることはめったになく、使用されたにしても、それが鶏や卵や靴やジャガイモといった日常的な資材の売買であることは決してないからである。それらは事物の入手ではなく、主として人びとのあいだの関係の調整のため、とりわけ結婚の取り決めや、殺人や傷害から生じるいさかいの調整のために使用されるのである。」(90頁)

アグリエッタらの批判。

負債論者は「人類学の文献を無視しながら古い法典に眼をむける傾向にその理由の一端はある。」(91頁)

「支払いとしての供犠といった観念が決して自明のものではないことがわかる。古代の神学者たちの仕事を詳しく調べてみると、神学者たちの大多数が供犠とは人間が神々と商業的關係をむすぶことのできるひとつの方法であるという考えになじんでいたこと、しかし、それをあきらかにばかげているとも感じとっていったことがわかる。そもそも欲するものすべてを神がすでに手に入れているとするなら、人間はいったいなにを取引すればいいのだろうか?というわけだ。・・・交換とは平等を含意しているものである。したがって宇宙の力と取引することなど最初から端的に不可能であると考えられていたのである。」(94～5頁)

批判：

「神々への負債が国家に領有されそれが税制の基礎となった、という考えもまた吟味に耐えうるものではない。ここで問題なのは、古代世界において、自由市民が税を支払うことは、ふつうはなかったということである。」(95頁)

古代メソポタミアの都市国家の神殿

有利子負債は、商人への貸付への融資から。メソポタミアは、羊毛と皮革産業。これを売って石や木、金属、金銀をえた。

「ヴェーダの創作におそらく 2000 年先立って、有利子の貨幣貸付という実践が最初に発明されたにもかかわらず——それに世界ではじめて国家が生まれた場所もまたメソポタミアであったにもかかわらず——、『原初的負債論者』がシュメールやバビロニアについてあまり語ることがないというのは奇妙なことである。しかしメソポタミアの歴史をみると、それほど意外なことでもないことがわかってくる。ここでもまたみいだされるのは、さまざまな点でこうして理論家たちの予想とは正反対の事態だからである。

ここで読者には、メソポタミアの都市国家が壮大な神殿によって支配されていたことを想起してもらおう。それらの巨大かつ複合的な産業施設には、羊飼いや船曳きから紡績工や織工、踊り子や聖職者兼行政官にいたるまで、しばしば何千もの人びとが配置されていた。遅くとも前 2700 年には、野心的な支配者たちはそれらの模倣をはじめ、似たような条件で組織された宮殿複合施設を構築している。ただし神殿の場合には、その中心に神または女神——召使たちである聖職者によってまるで生きている人間のように食事や衣服を与えられ娯楽も提供される聖像に表象された——の部屋が置かれていたが、宮殿の場合、現実には生きている王の寝殿をその中心に置いていた点が違っていた。シュメール人の支配者たちは、それに近いところまでいくことはあっても、おのれを神だと宣言するにまでいたることはめったになかった。しかしながら、宇宙の支配者の権能において臣下の生に干渉するとき、公共の負債を課すよりも、民間の負債を帳消しにするという手段を彼らはとったのである。

いつ、そしてどのようにして有利子貸付が生まれたのか、正確にはわからない。それは文字に先行するようだからだ。神殿の管理者が、隊商による交易に融資する方法としてそのアイデアをおもいついた、というのが可能性としては最も高い。古代メソポタミアの川谷はきわめて肥沃であり、莫大な余剰穀物およびその他の食物を生み出し、おびたしい数の家畜を養い、ひるがえってそれが巨大な羊毛および皮革産業を支えていた。ところが、それ以外にはほとんどなにもなかったため、この交易がきわめて重大な意味をもったのである。石や木、金属、さらには銀さえも貨幣として使用されていたが、それらはどれも輸入しなければならなかった。そのため、きわめて古くから神殿の管理者たちは地元商人——商人たちは民間人であることも神殿の官吏自身であることもあった——に物財を前貸しする習慣を発展させ、ついで商人たちはそれを売るために海外に遠征したのである。神殿にとって利子はそこから発生する利益の分け前をうる方法のひとつにすぎなかった。しかしながらいったん確立されるや、その原理はあつというまに普及したようだ。まもなく、商業貸付だけでなく、消費貸付も出現する。これは、その語の古典的な意味で微利〔高利〕である。前 2400 年頃にはすでに、地方公務員や大聖人が財政難におちいった農民に対して担保を取って貸付をおこない、返済できなくなるとその財産を取り上げることが広範な観光であったように見える。取り上げられる財産は多くの場合、穀物、羊、ヤギ、家具からはじまり、ついで畑や家、そして最終的には、家族の一員にまでいたった。召使がいたら即刻とられ、その後、子どもや妻がつづき、極端な場合には債務者自身にまでおよんだ。そして『負債懲役人』におとしめられることになる。負債懲役人とは奴隷ではないが奴隷にきわめて接近した存在であり、債権者の家庭、ときには神殿や宮殿で永久に奉仕を強制された。理論上ではもちろん債務者が借金の返済を終えれば免責されるはずだが、いわずもがな資産がむしり取られれば取られるだけそれは困難になっていった。

その帰結は多大なものがあり、しばしば社会を引き裂く脅威となった。」(96~98 頁)

● ここでグレーバーは外国貿易について触れているが、神殿や宮殿が、商人に輸出財貨を貸し付けたとしても、外国とは商品交換である。グレーバーは貿易金融だけにしか注目していない。商人が外国で商品交換をする際に物々交換であったり、世界貨幣を交換手段として利用していたことだろう。

「全面的な社会崩壊の可能性に直面し、シュメールのちにはバビロンの王たちはくり返し、

経済史家マイケル・ハドソンが『クリーンストレート』と呼ぶところの全面的特赦を布告している。典型的には、こういった法令によって未払いの消費者債務は無価値、無効であると宣言され（商業貸付の債務は影響を受けなかった）、土地はもとの所有者に戻され、負債懲役人もわが家に帰宅することができた。ほどなくして全面的特赦の布告は権力の座にはじめてつく王の習慣となり、また多くの王たちがその在位期間中に定期的にその布告をくり返すよう強いられたのである。

シュメール語でそれは『自由の宣言』と呼ばれた。そして知られるかぎりの人間の言語のなかで『自由』を意味する最古の語であるシュメール語のアマジの文字通りの意味が、『母のもとに戻る』であるのは意味深い。というのも、解放された負債懲役人について認められたものこそ、それであるからだ。」(98頁)

「まもなく、商業貸付だけでなく、消費貸付も出現する。これは、その後の古典的な意味で微利〔高利〕である。前2400年頃にはすでに、地方公務員や大商人が財政難におちいった農民に対して担保を取って貸付を行い、返済できなくなるとその財産を取り上げることが広範な慣行であったようにみえる。」(97頁)

財産には土地、子供や妻や債務者自身。「負債懲役人」

「負債懲役人とは奴隷ではないが奴隷にきわめて接近した存在であり、債権者の家庭、ときには神殿や宮殿で永久に奉仕を強制された。」(98頁)

債務帳消

このような例を原初的負債論者の想像力の外にある。「おそらくこういった研究全体の問題は、最初の仮定、すなわち『社会』なるものに対する無限の負債からはじめるという仮定である。そこでは、神々にむけてひとが投影しているのは社会に対するこの負債であるということになる。そして、つづいて王たちや国民政府によって徴収されるのは、このおなじ負債であるというわけだ。」(99頁)

社会という観念をいつ人がもつようになったか。政府に属しているということ自体明白ではなかった。

### ○ 3. 古代人の負債論

自己の存在をなにに負っているか。古代人の考えを現代風に示している。

① 宇宙と宇宙の力、つまり自然。＝存在の基盤。「これに対する負債は儀式によって返済される。儀式は小さきわれわれを凌駕する存在すべてへの敬意と承認の行為である。」

② 知識と文化的成果に対して。「それらの人びとに対する負債は、わたしたち自身が学習し人間の知識と文化に貢献することで支払われる。」

③ 祖先に対して。「じぶん自身が祖先となることで返済される。」

④ 人類全体に対して。「異邦人に対する寛容によって、人間的諸関係つまり生を可能なものにする、社会性にかかわる基本的なコミュニズムの土台を維持することによって返済する。」(101～2頁)

「このように整理してみると、議論が前提そのものをむしばみはじめる。これらは商業的負債とはなんの関係もない。」(102頁)

「すでに万物を有しているゆえに神々との取引が不可能であるとすれば、宇宙との取引もまちがいなく不可能なのだ。」(102頁)

「人類または宇宙から分離した存在としておのれをみため、こうして一対一の取引を可能であるとする想定自体が、死によってのみ返答の与えられる犯罪なのである。わたしたちの罪責性は、宇宙に対する負債を返済できないことによるものではない。わたしたちの罪責性とは<存在するすべて、またはこれまで存在してきたすべて>と、いかなる意味であれ同等のものであると考えるほどおもしろいあがっているため、そもそもそのような負債を構想できてしまうことにあるのだ。」(102～3頁)

「今日の個人主義的な社会にふさわしいエートスを求めるとするならば、次のようにいえるだろうか。ひとはみな人類、社会、自然または宇宙に対して無限の負債を負っているが、べつのだれかが支払い方法を指示できるわけではない、と。これは少なくとも知的には筋

が通っている。もしそうだとすれば、確立された権威のシステムのほとんどすべて——宗教、道徳、政治、経済、刑事司法体制——をそれぞれ異なる欺瞞の方法とみなすことができる。それは計算不可能なものを計算できるといふ、制約なき負債のうちのあれこれの部分をかくかくしかじかのように返済せよと指令する権限を詐称するにすぎないのだ、と。だとすれば、人間の自由とは、返済方法をどうしたいかをじぶん自身で決定するわたしたちの能力ということになる。

わたしの知るかぎりこれまでこのような発想をした者はいない。実存的負債についての理論は、そのかわり権威の構造を正当化する——あるいは権威の座を主張する——手段に常に堕してきた。」(103頁)

コント、

社会への無限の義務、という考えが「社会的負債」という観念に結晶化し、社会運動家に取り入れられた。

「デュルケームにとって宗教とはすべて、わたしたちの相互依存、決してその総体について自覚されることのない無数のやり方でわたしたちに影響している依存を、認識する方法にすぎないのである。『神』と『社会』は、究極的に同一のものなのだ。

これまで数百年にわたって、相互依存によって誰もが負う負債の守護者、個人を個人たらしめている無形の社会的総体の正当な代理人は、必然的に国家でなくてはならないと想定されてきた。これが問題なのである。」(106頁)

「『原初的負債』という思想のうちに、究極のナショナリズム神話をみてとることさえできる。」(107頁)

● 古代人の負債についての考え方は面白い。現代の負債についての考え方が、すべてを商業的関係に擬して物事を考えていることへのイデオロギー的批判が意図されている。しかし、この種のイデオロギー的批判は果たして有効か、検討の余地あり。

過去：神々への負債を生贄で利子を払う。

現在：国家に負っている負債を税で利子を払う、国の防衛には生命で支払う。これは20世紀の大いなる罫。

市場の論理と国家の論理の二分法。これがまちがい。

「国家は市場を創造する。市場は国家を必要とする。どちらもたがいなくしては存続しえないし、少なくとも今日知られているようなかたちでは存続しえないのである。」(107頁)

#### 第4章 残酷さと贖い

貨幣を商品とみるものたちと借用証書とみる者たち、グレーバーは双方である。

「かくして貨幣は、商品と借用証書のあいだをほとんど常にさまよっているのである。」(113頁)

「いいかえるなら、国家と市場、政府と商人の抗争は、人間の条件にとって本来的なものではないのである。」(113頁)

#### ○ 4. ニーチェ批判

ニーチェ『道徳の系譜学』1887年公刊

ニーチェからの引用「負い目という感情や個人的な義務という感情はすでに指摘したように、存在するかぎりでも最も古く、最も原初的な人格的關係に根ざすものである。すなわち買い手と売り手の関係、債権者と債務者の関係から生まれてきたものなのだ。・・・値段をつけること、価値を測定すること、同等な価値あるものを考えること、交換すること——これらは人間のごく最初の思考において重要な位置を占めていたものであり、ある意味では思考そのものだったのである。」(114頁)

ブルジョア的思考の枠内

イヌイットは、「打算の拒絶、だれがなにをだれに与えたか計算したり記憶することの拒絶に真に人間であることのしるしがあると主張した。」

ニーチェの意義、ニーチェの議論からは宇宙との取引という思考を導く



「人間の条件を考えるために市場の言語を借用したのは、プラーフマナの書き手たちだけではなかった。実のところ、多かれ少なかれ、主要な世界宗教すべてがそうしてきたのである。」(121 頁)

ネヘミヤ記

債務帳消

「メソポタミアにおいてと同様に、聖書においても、『自由』とは、なによりもまず負債の影響からの解放を意味するようになった。」(123 頁)

世界宗教の両義性 「一方で、世界宗教は市場に対する怒号である。ところが他方で、そうした異議を商業的な観点から枠づけてしまう傾向をも世界宗教は有しているのである。」(127 頁)

カースト制や奴隷制への抗議行動は見られないのに、債務者たちの抗議が受け入れられるのか。

「負債をそれ以外のことがらから峻別しているのは、それが平等の仮定を条件としていることである。」(129 頁)

## 第5章 経済的諸関係のモラル的基盤についての小論

「負債がなにかを本当に理解するためには、人間が他者と切り結ぶそれ以外の義務とそれがどう異なっているか、理解することが必要になる。」(135 頁)

### ○ 5. 独特のコミュニズムの定義

贈与交換に注目するのは一面的

互酬制 互酬性とは「公平、均衡、公正、対称性といった感覚であり、もろもろの尺度の集合体としての正義のイメージのうちに体现されている。」(136 頁)

レヴィ・ストロース 人間生活の言語、親族、経済の三領域の交換システムからなる。

思考実験：コミュニズム、ヒエラルキー、交換、という三つの主要なモラルの原理。

コミュニズム

「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて、という原理にもとづいて機能する、あらゆる人間関係」(142 頁)

マルクス主義の用法とは異なる。この単一の原理によって組織された社会はあり得ない。あらゆる社会システム、資本主義社会も含め、この基盤の上に築かれている。

資本主義のもとでの労働にもこの関係はある。「あらゆる人間の社交性の基盤」(144 頁)

「基盤的コミュニズム」、コモンズ、歓待の法。

コミュニズムを単に所有の問題としてではなく、モラルの原理として考えること。

交換

「コミュニズムは、これまでみてきた通り、相互的な期待と責任を必然的にふくむという意味をのぞいては、交換にも互酬性にも基礎をおいていない。」(154 頁)

「交換とは等価性にまつわるすべてである。」(154 頁)

「商業的交換の特徴は、その『非人格性』である。」(155 頁)

ヒエラルキー

「真の慈善は、受取人に負債を負わせようなどとはしないということだ。」(164 頁)

「優劣の線がはっきり引かれ、関係を規制する枠組みとしてすべての関係者に受け入れられ、さらに気まぐれな力の行使に悩まされないほど関係が十分に継続しているようなときは、常に関係は習慣と週間の網の目によって統制されているものとみなされるであろう。」(166 頁)

「ある行為が反復されると、それは習慣となり、その結果、習慣は行為者の本質的性格を決定するようになる。」(168 頁)

様相間の移動

「互酬性とはわたしたちが正義を想像する主要な方法であるという事実」(171 頁)

● 以下に負債の定義的なものがある。

「では、負債とはいったいなにか？

負債とはきわめて個別具体的な事象である。そして負債は、きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは、根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり、本質的な次元において実際に対等であるのだが、現在のところ対等な地位にはない。だが、事態を回復する何らかの方法がある、といった二人の関係である。」(181頁)

「負債が返済されていないあいだ、ヒエラルキーの論理が支配的になる。互酬性は存在しない。」(182頁)

「かくして負債とは完遂にいたらぬ交換にすぎないのである。」(183頁)

「すべての人間の相互作用が交換の諸形式であるということはない。交換の形式をとるものもあるというにすぎないのである。」(183頁)

## 第6章 生と死のゲーム

### ○ 6. 人間経済と社会的貨幣

● いったん定義した負債について、市場が登場する前の経済と後の経済の対比をしている。

「しばしばこうした通貨がきわだって重要なものになるのは、社会生活そのものが、そうした物質を獲得し配分することを基軸としてまわっているようなときである。しかし、あきらかにそれらの通貨は、貨幣あるいはまさに経済とは実のところなんなのかについて、[わたしたちの常識とは]完全に異なった考え方を表現している。そこでわたしは、それらを『社会的通貨』と呼び、それらを使用する経済を『人間経済』と呼ぶことにした。」(198頁)

「人間経済において人びとが蓄積しているには、どのような負債なのか？どのような種類の貸し借りなのか？そして人間経済が商業経済に席をゆずるとき、あるいは凌駕されるとき、なにが起きるのか？」(199頁)

「起源における『原始貨幣』は、いかなる意味でも借りを返す方法ではなかった。どうやっても支払い不可能である負債の存在を承認する方法だったのである。」(200頁)

「実のところそれは、どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認なのだ。女性の贈与に見合う支払いは、ただひとつ、べつの女性の贈与のみである。それまでは、ひとができることといえば、ただ、その未払いの負債を認知することだけなのである。」(201頁)

「ここからおなじみの問題にみちびかれるのは明白である。支払いよのない負債の承認のしるしが、それによって負債が消滅するような支払い形態に転化できるのはいかにしてか？」(208頁)

「村の生活にまつわる大きな事件や悲劇はどれも、たいてい女性をめぐる権利へと帰着することになる。」(213頁)

「あきらかにこれは、資産を最大化することに等しい。つまり、ひとが望んでいたのは、妊娠し、子どもを産むことのできる人間であった。」(214頁)

● 奴隷の定義。最初の商品？

「人間経済においては、なにかを売ることができるようにするには、まずそれを文脈から切り離す必要があるのだ。奴隷とはまさしくこれである。すなわち、奴隷とはじぶんたちを育てあげた共同体から剝奪された人びとのことである。」(222頁)

「大西洋奴隷貿易総体は、巨大な信用協定のネットワークであった。リヴァプールやブリストルを拠点とした船舶所有者たちは、地元の商人たちから有利な条件で融資を受けて物財を入手していた。アンティル諸島やアメリカのプランテーション経営者に奴隷を売却して上がる儲けを見込んでのことである。」(229頁)

「ヨーロッパ人が出現した1500年頃までには、西アフリカの王国や貿易都市の多くで、人質制度の性格はすでに根本的な変化をこうむっていたようだ。それは実質的にある種の負

債権者制度と化していたのである。債務者は、貸し付けを受ける担保として家族の成員をさしだす。」(230 頁)

「暴力の全般化した環境が現存する人間経済のすべての制度の体系的な逸脱をみちびいたこと、そのとき人間経済は非人間化と破壊の支配する巨大な装置に転化してしまったということ、これである。」(231 頁)

アフリカは例外ではない。(236 頁)

「わたしは本書を、ある問いからはじめた。なぜ、人びとのあいだのモラル上の義務が負債と考えられるようになり、その結果、逆にまったくインモラルなおこないを正当化することになったのか？」(240 頁)

ヒトの計算可能性、ヒトを存在する文脈から剥奪すること。(241 頁)

## 第7章 名誉と不名誉 あるいは、現代文明の基礎について

アフリカの近世の人為的な奴隷制は歴史的過去の自然発生的過程の、意図的な静止画としての意義がある。「人間をその文脈から剥奪し、抽象化することにかけては比類なき能力を有する奴隷制が、いずれの地においても市場の発生に重要な役割を演じたと考えるに足る根拠があるからである。」(250 頁)

「歴史の大部分を通じて、奴隷たちが支配者に対して蜂起したときでも、奴隷制それ自体に対決することがほとんどなかったことの原因を考えると、」(253 頁)

名誉とは過剰な尊厳(過剰尊厳)である

「奴隷制とは、ある人間固有の文脈から、つまり、人をその人たらしめているあらゆる社会関係から剥奪されるということの究極的な形式である。べつのいい方をすれば、事実上、奴隷は死んでいるのである。」(254 頁)

名誉代価(中世初期のアイランド)

「どの自由人も、じぶんの『名誉代価』つまり尊厳への侮辱に対して支払われるべき価格をもっていった。」(261 頁)

アイランド、すべてが異様なほど克明に記述されている。(263 頁)

「奴隷の価値とは、奴隷から取り上げられた名誉の価値であるからだ。」(264 頁)

「じぶんの家族の女たちを保護する能力は男の名誉の本質的な一部分である。」(265 頁)

「かつては尊厳を測定することに使用されていたおなじ貨幣が卵や散髪に支払うために使用されはじめると、その経済になにが起こるのか？古代メソポタミアや地中海世界の歴史があきらかにするように、その結果は根底的かつ永続的なモラル上の危機であった。」(266 頁)

### ○ 7. 女性の地位

メソポタミア(家父長制の起源)

名誉という言葉、もともと名誉代価。市場の拡張とともに、一方では価格、他方では市場への軽蔑、という両義性を持つ。(266~7 頁)

危機という語の文字通りの意味は十字路である。(267 頁)

「貨幣と市場の勃興とともににながかくも多くの男性たちに性に対する不安をひきおこしたのだろうか？」

これはむずかしい問いだが、少なくとも人間経済から商業経済への移行によって、あるモラル上の矛盾がひき起こされたことは想像できる。」(268 頁)

「これからみていくように、まさにこうしたモラル上の危機のなかにこそ、名誉についてのわたしたちが現在抱いている概念の起源のみならず、家父長制それ自体の起源をもみいだすことができる。」(268 頁)

シュメール語の文書、前 3000 年から 2500 年。女性が偏在している。女性の統治者珍しくなかった。つづく数千年のあいだに、変化した。

「市民生活における女性の地位が崩壊するのである。徐々に、おなじみの家父長制的なパターンが貞節と結婚前の処女性に力点を置きながら形成され、行政と自由業における女性

の役割は弱体化し、やがて消滅した。こうして女性の法的地位は失われ、それによって夫の被後見人と化していったのだ。」(269頁)

科学や技術の進歩、学習の蓄積、経済成長、要するに人間の進歩、女性にとってはしばしば事態は正反対だったようにみえる。(269頁)

「これまで強調してきたように、歴史的にみると、戦争と国家と市場はすべてたがいに育み合う傾向にある。征服は徴税につながる。徴税は市場を創設する手段となる。市場は兵士と行政官にとって好都合である。メソポタミアの事例にかぎっていえば、こういったすべてが負債の爆発的上昇と複雑な関係をもち、負債の爆発的上昇はあらゆる人間関係——その延長で女性の身体——を潜在的商品に変容させる脅威をもたらしていた。」(270頁)

「人類学の一般的な知見では、相対的に人口が少なく、土地がとくに不足しているわけではなく、それゆえに政治がもっぱら労働管理になっている状況においては、『花嫁代償』が一般的になる傾向がある。人口が過剰で土地が不足している場合には、それにかわって『持参財』が広がる傾向にある。つまり女性一人が家族に加わることは食い扶持がひとつ増えることである。」(270頁)

処女の値段、結婚は女性の入手、財と同じ扱い。(271頁)

「この展開に奴隷制が一役買っていたのはまちがいない。実際の奴隷が多数存在したことはまれであるのだが、いかなる血縁もため商品にすぎない人びとの一群の存在することそれ自体が決定的であった。」(271頁)

「とはいえ、ここで真に決定的な要因は負債であった。」(272頁)

「メソポタミアの夫も妻を売ることはできなかった。あるいは通常はできなかった。ところが夫が借金に頼ってしまったとき、すべてが一変する。というのも借金となれば、そのために妻子を抵当に入れることは——みてきたように——完全に合法であり、返済できなければ、まさに奴隷や羊や山羊とまったくおなじように、債務の人質である妻子を奪われる可能性があったのだから。このことはまた、名誉と信用が実質的に同一のものになったことを意味する。少なくとも貧しい男にとって、じぶんの信用価値とは、まさにみずからの世帯に対する統率力であった。そして家庭における権威ある関係、すなわち原則として配慮し保護する責任であるような関係が、実際に売買可能であるような所有権となったのである。」(272頁)

神殿の娼婦たち、重要な存在。

「生殖を目的としない性交、快樂のための性交は神聖なものとみなされていた。」(274頁)

「『家父長制』とは、なによりもまず、ある種の純潔の名のもとに大いなる都市文明を拒絶するという身ぶりのうちに起源をもっている。すなわち、官僚、商人、娼婦のふきだまりとみなされていたウルク、ラガシュ、バビロンといった大都市に抗って父による統制の再確立を志すものである。」(275頁)

「古代中東における抵抗は常に、反乱の政治というより大脱出の政治、つまり共同体や家族とともに——しばしば連れ去られてしまう前に——逃散することの政治である。」(276頁)

「世界中の聖典——旧約聖書、新約聖書、コーランをはじめ中世から現代にいたるまでの宗教文学など——は、腐敗した都市生活に対する軽蔑と商人に対する疑念、そしてしばしば強烈な女性嫌悪症の合体からなる、この叛逆の声を反響している。」(276頁)

「わたしたちの知る家父長制は、新興エリートと新興破産者たちのあいだの一進一退の戦いのなかで形成されたものなのである。」(277頁)

フェミニスト ゲルダ・ラーナー

「国家は、商品化を促進すると同時にその結果を改善するために介入するという複雑な二役を演じていたようだ。つまり負債の放棄と父の権利を強化しながらも、周期的に恩赦を与えるという二役である。だがこの力学はまた、数千年のあいだに、性愛それ自体を、神からの贈与および文明的洗練の具現から不名誉、腐敗、罪業にむすびついたおなじみの連想への、体系的な格下げにみちびいたのである。」(279頁)

## ○ 8. 古代ギリシャ

古代ギリシャ、商品化がシュメールに 3000 年遅れたので資料が多い。

古代ギリシャ

「ホメロスの叙事詩の世界は、交易を軽蔑する英雄的戦士たちの支配する世界である。多くの点で、その世界は中世アイルランドを顕著なまでに彷彿させる。」(281 頁)

「その 200 年後に商業的市場が勃興をはじめると、すべては劇的に変化する。ギリシャの鑄貨は、当初、主要には兵士への支払いのために使用されていたようだ。だが前 600 年ごろになると、ほとんどすべてのギリシャの都市国家は、市民的独立のしるしとして独自の硬貨を鑄造するようになる。とはいえ硬貨が日常取引に一般的に使用されるようになるまで、長くはかからなかった。前 5 世紀には、ギリシャ諸都市における公開討論と共同体の集会の場であるアゴラが、市場の役割も担うようになっていく。」(281 頁)

政治は中東と異なった。

「ほとんどの都市が最終的にみいだした解決策は、近東のそれとは大きく異なるものであった。定期的な恩赦を制度化するかわりに、ギリシャ諸都市は負債懲役制度を制限するか全面廃止する方向にむかい、次いで将来の危機を防ぐため〔領土〕拡張政策をとり、貧者の子供たちを送り込んで海外に軍事的植民地を確立したのである。またたくまにクリミアからマルセイユまでの沿岸全体にギリシャ人都市が点在するようになり、今度はそれらの都市が活発な奴隷貿易の流通経路としての役割をはたすようになった。奴隷の急増は、転じて、ギリシャ社会の性格を徹底的に変質させた。なによりも、つつましい生活を送る市民さえも都市の政治的・文化的生活に参加できるようになり、真の市民的意識を抱くようになったのである。だがこのことが旧貴族階級をして、新しい民主国家の卑俗性やモラルの荒廃と彼らの眼にはみえたものからみずからを遠ざけるべく、ますます手の込んだ手段を発展させるように駆り立てたのである。

ギリシャが真の幕開けをむかえる前 5 世紀には、だれもが金銭について議論していた。現存するほとんどの文献の執筆者たちは貴族であるが、彼らにとって金銭とは腐敗の化身であった。貴族たちは市場を軽蔑していた。名誉ある男たちの理想は、必要なものすべてをじぶん自身の地所で調達し、現金をいっさい手にしないことだったのだ。」(282 頁)

「いずれの場合も貴族たちは、贈与と気前のよさと名誉の世界をあさましい商業的交換の上位に位置づけたのである。」(282 頁)

ヴェールの着用がギリシャでは普及した。(283 頁)

「かくて貨幣は、名誉の尺度から転じて名誉でないものすべての尺度と化してしまった。男の名誉は金で買えると示唆するふるまいは、とてつもない侮辱となる。」(284 頁)

貴族たちも貨幣をほしがっていた。「貨幣は欲望の民主化を持ち込んだ」(286 頁)

男性市民の家族を市場の危険と自由から守る努力。コミュニズム的所関係が過程の内側に限定されるようになった。(287 頁)

英雄時代は、名誉と信用とは等しかった。(291 頁)

「かつてモラル関係の本質であったものが、徐々に、そして微妙なかたちで、あらゆる種類の不誠実な策略の手段に変化してきた。」(291 頁)

「アテナイでは、その帰結は手のつけようのないモラル上の混乱であった、貨幣、負債、金融の言語が、モラルの問題についての強力な——かつ最終的には抵抗しがたい——思考法を提供したのである。人びとは、ヴェーダ時代のインド同様、生を神への負債ととらえ、義務を負債と考え、名誉の負債〔信用借り〕を文字通りに信じ、負債を罪悪、復讐を負債の回収とみなしはじめた。」(294 頁)

正義が存在するとしたら、それは強いものの利益に

「なにごとかの追及は、総じて、究極的には権力、優越性、私的利益の追求であるという発想はいうまでもなく、『権力』や『利益』といった言葉がそれ自体、追及の対象となりうる独自の普遍的現実を指し示しているといった発想を可能にするのは、貨幣の存在のみである。」(296 頁)

「わたしたちが今日、モラル理論と政治理論の中核をなす伝統とみなしているものが、自

分の負債を返済するとはいったいなにを意味するのか、という問いに源泉をもっていること、そして、それはどの程度そうなのか、ということである。」(296 頁)

「最終的にプラトンの示唆するのは、冷笑的な現実政治である。」(296 頁)

プラトンは自分を助けてくれた人には言及していない。297 頁

## ○ 9. 所有論

古代ローマ

ローマ法

所有

「ローマ法において、所有すなわちドミウムとは、人が物に対して持つ絶対的権力によって特徴づけられる『人と物との関係』である。この定義は、はてしのない概念上の問題を引き起こしてきた。まず、生命をもたない物体と人間が『関係』をもつことがどうか、はっきりしない。人間どうしは関係をもつことができる。だが、その関係は常に相互的なものだ。では、物と『関係』をもつとは、いったいどういうことか？・・・そこにほかにだれもいなければ、所有権についておもしろい悩む必要などないからだ。

すると、所有とは人と物の関係などではないことはあきらかである。それは、物にかんする人びとのあいだの了解あるいは取り決めなのである。」(299 頁)

「しかし、無理からぬことであるが、ひとりの人間と地球上のそれ以外の全員のあいだの関係を、それそのものとして把握することは難しい。物との関係として考える方がずっとかんたんなのである。」(299 頁)

● この事態に現象形態と幻影的關係との対比を適応できるか？

「絶対的私的所有という観念は奴隷制に由来している。つまり、所有を人間どうしのあいだの関係ではなく人間と物とのあいだの関係として想像するには、どちらかの一方が物であるような二人の人間どうしの関係を出発点とすればよい。」(301 頁)

「ローマの法学者たちがなによりもまずおこなったのは、家庭内の權威の原理、すなわち人間に対する絶対的権能の原理を取り込み、そういった人間の一部を物として定義し、もともとは奴隷に対して適用されていた論理を、ガチョウや馬車や納屋や宝石箱などなどに、つまり法律が関与するすべてにまで、拡張することであった。」(303 頁)

「しかしながら、ローマの奴隷制による浸透力ある悪影響の最たるものは、ローマ法を通じて、人間の自由についてのわたしたちの観念に大混乱がもたらされたことである。・・・古代世界のどこにおいても、『自由』であることはなによりもまず奴隷ではないということの意味していた。」(306 頁)

「自由とは原理的にみずからの所有物についてなんでも好きなことをする権利であると考えた伝統は、まさにこれなのである。実際には、その伝統によれば所有は権利とされるだけにとどまらず、権利それ自身が所有の一形式とみなされるのだが、ある意味でこれは、逆説中の逆説である。」(309 頁)

「賃労働、それは実質的には、奴隷制が自由の売却とみなしうるように、自由の貸与なのである。」(311 頁)

王と奴隷は鏡像。

「ここでようやく、じぶん自身を主人であると同時に奴隷として定義するわたしたちの奇妙な習慣について、みずからの自由の主人としての自己とか、じぶん自身の所有者としての自己とか、そのような概念でもって古代の世界の最も野蛮な側面を複製しているわたしたちの奇妙な習慣について、つまるところいったいなにが問われているのかがみえてくる。これこそが、わたしたち自身を完全に孤立した存在として想像しうる唯一の方法なのである。」(316 頁)

「暴力についてならば、その大部分は視界の外に追いやられた。」(317 頁)

● これがなぜ、どうしてそうなのかの解明が、物象化論だ。

## 第8章 『信用』対『地金』——そして歴史のサイクル

## ○ 10. 信用と地金

硬貨ができたのは、前 500 年から 600 年、三つの場所で独立して開始されたようだ。(322 頁)

「イノベーションがそこから拡がっていた。1000 年以上をかけて、あらゆる地域で国家による硬貨の発行がはじまった。しかし、およそ 600 年頃、つまり奴隷制が消失をはじめた時代に、この動向は突然、逆流しはじめる。現金が干上がってしまったのだ。あらゆる場所で、ふたたび信用システムへの回帰への動きがみられた。

ユーラシア大陸の過去 5000 年の歴史をみると、信用貨幣が支配的な時代と金銀が支配的な時代とが長期にわたって相互に入れ替わる、という事態が観察される——金銀の時代とは、少なくとも取引の大部分が高価な金属片の手から手への引き渡しによっておこなわれた期間のことである。」(322 頁)

● 問題は外国貿易が信用貨幣によっていたかどうかということ。信用は都市国家のようなシステム化された社会でしか通用しない。これはグレーバーも認めるところ。

メソポタミア (前 3500～前 800 年)

「すでに最初期の都市文明として知られるメソポタミアでは信用貨幣が支配的であったことについてみてきた。大いなる神殿と宮殿の複合体において、貨幣はその大部分が、物理的な取引というより、計算の尺度として利用されていた。さらに、商人や小売人たちは、独自の信用協定をさまざまに発展させていた。これらのほとんどは、将来の支払い義務を刻んだ粘土の銘板という物理的な形態をとったが、さらに粘土の包みで封じられ借主の紋章が刻印されていた。債権者はその包みを保障として保持し、返済のさいには壊して開封したのである。少なくとも、いくつかの時代いくつかの場所においては、こうした紋章は、わたしたちが今日、為替手形と呼ぶものに変化していったように見える。というのも、その内部の銘板は、単純にもととの貸主に返済する約束を記録しているのではなく、『持参人に宛てられていた』からである。いいかえると、たとえば 5 シェケルの銀の負債を記録する銘板は、5 シェケル相当の約束手形として——つまり貨幣として——流通していたのである。」(324～5 頁)

「一般のメソポタミア人たちが往来していた市場については、わかっているのは居酒屋の店主たちが信用貸しを利用していたこと、そしておそらく行商人や露店管理者も同様であろうことぐらいで、それ以外あまり知られていない。

利子の起源は永遠に不明確なままだろう。文字の発明に先立っているからである。」(325 頁)

「最初に広がりを見せた有利子貸し付けが商業的なものだったという見方である。すなわち神殿や宮殿が売り物を商人や仲買人に委託する、次いで商人や仲買人がそれをもって近隣の山岳王国や海外へむかう隊商と取引する、といった商業活動にあるというのである。」(326 頁)

「帳消しの対象は、未払の貸付のみならず、あらゆる債務による束縛、手数料あるいは罰金の支払い不能による負債さえもふくまれていて、外されていたのは商業的融資のみであったのである。」(328 頁)

「帳消しの対象は、未払の貸付のみならず、あらゆる債務による束縛、手数料あるいは罰金の支払い不能による負債さえもふくまれていて、外されていたのは商業的融資のみであったのである。」(328 頁)

## 第 9 章 枢軸時代 (前 800—後 600 年)

### ○ 11. 世界宗教の登場の意味

「そこで枢軸時代を前 800 年から後 600 年と定義してみよう。すると枢軸時代は、世界の主要な哲学的潮流すべてのみならず、ゾロアスター教、預言者的ユダヤ教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教、儒教、道教、キリスト教、そしてイスラーム教という、今日の主要な宗教すべての誕生を目の当たりにした時代となる。」(337 頁)

「ほとんどの貴金属は、富裕な女性の足首飾りや王が家臣に贈る先祖伝来の聖杯のかたち

をとるか、貸付の抵当としてインゴットのまま神殿に貯蔵されていた。ところが、どうい  
うわけか枢軸時代に、こうした事態がいっせいに変化をはじめ。経済史家たちが好む言  
い方では、大量の金と銀と銅が『脱宝物化』するのである。それらは神殿および富裕層の  
邸宅からとりだされ、ふつうの人びとの手にわたり、小さな断片へと分解され、日常の取  
引で使用されはじめたのである。」(339 頁)

「そのほとんどは盗まれたのだ、と。この時代は戦争が一般化した時代である。そして、  
戦争の性質上、貴重品は略奪されるものである。」(339 頁)

「枢軸時代には、それに加え、またもや中国、インドそしてエーゲ海沿岸に共通した新し  
い現象がみられた。貴族の戦士とその家臣ではなく、訓練を受けた職業軍人によって編成  
された新種の軍隊の隆盛である。」(340 頁)

「以降、国家発行の硬貨のみを報酬、礼金、税金として受け入れると布告することによっ  
て、国家は、後背地にすでに存在していたおびただしい社会的通貨を圧倒し、統一的な国  
内市場のようなものを確立することができたのである。」(341 頁)

「軍事＝鑄貨＝奴隷制複合体」(344 頁)

「枢軸時代には人類においてはじめて、書き言葉を学ぶことがもはや聖職者と官吏と商人  
に限定されることなく、市民生活に十全に参加するうえで不可欠になった時代である。」  
(355 頁)

「なにが変化したのか理解するには、枢軸時代のはじまりに出現したある特殊な種類の市  
場にふたたび目をむける必要がある。すなわち、隣人さえも赤の他人のごとく扱うことを  
可能にした、戦争から生まれた非人格的な市場である。」(356 頁)

「ここから枢軸時代には人間の動機についての新しい思考法が生まれる。すなわち動機の  
根本的な単純化であって、それが『利益』や『優位性』のような概念について語りはじめ  
ることを可能にするのである。そして次のような想像をめぐらせることも可能になる。人  
間が本当に追及しているものは、いついかなるときもそれ〔利益、優位性〕である、と。」  
(357 頁)

イオニアのミレトス 「貨幣制度がはじめて導入されたその時代に、その都市に生きてい  
た男たち」(366 頁)

「硬貨は一片の金属である。だが、特定の形状を与え、言葉と像を刻むことによって、そ  
れを一片の金属以上のものにするに、市民共同体は合意したのである。だがこの力は  
無際限ではない。」(367 頁)

「ギリシャの硬貨に刻み込まれた像は、典型的には都市の神の紋章だった。しかし、それ  
らは、ある種の集団的約束でもあった。その約束によって、市民たちは、以下をたがいに  
保証しあったのである。当該の硬貨が公的負債の支払いにさいして受領されるのみならず、  
だれもがどんな負債に対してもその硬貨を受領し、それゆえだれがなにを欲するときもそ  
の硬貨が使用できること。」(368 頁)

「アイデアとはなにか？それらはたんなる集団的習慣なのか？プラトンが主張したように、  
物質的実在の彼岸である聖なる領域に存在するのか？あるいは、わたしたちの頭のなかに  
存在するのか？あるいは、わたしたちの精神自体が、究極的にはこの聖なる非物質的領域  
の一部なのか？もしそうだとすれば、そのことは、わたしたちが、自身の身体ととりもつ  
関係についてなにを意味しているのか？」(369 頁)

370 頁からのまとめの一部分

「(6) どこにおいても、非人格的市場によって提供された新しい知的道具を使って新しい  
モラルの基盤を考案してやろう、という初発的衝動があったようだ。そしてどこにおい  
ても、それは頓挫した。社会的利益という思想をもってその課題に応じた墨家は、わずかの  
あいだ隆盛をきわめたかとおもうと、たちまち瓦解した。そして、そのような思想を全面  
的に拒絶した儒家が取って代わったのである。すでにみたように、モラル上の責任を負  
債の観点から再定義しようとする試みは——ギリシャとインドとに出現した衝動だったが——  
新たな経済的状况によってほとんど不可避的だったとはいえ、一様に不満を残すものであ



ったようにみえる。それよりいっそう強力な衝動が、負債が全面的に廃棄されてしまうような、もうひとつの世界を構想することのうちはみられる。だがそこでは、ちょうど身体が監獄であるように、もろもろの社会的絆も束縛の諸形態とみなされてしまったのだ。

（7）統治者の姿勢は、時とともに変化した。当初は、個人としては冷笑的は現実政治の諸説を信奉しながら、新しい哲学的、宗教的諸運動に対しては興味本位の寛容を示していた。だが、交戦する諸都市および諸公国に大帝国がとってかわるにつれ、そしてとりわけこれらの帝国が拡張の限界に達して軍事＝鑄貨＝奴隷制複合体を危機に引きずり込むにつれて、すべてが変化した。（国教化が始まる）」（371～2 頁）

「（8）その最終的効果は、人間の活動領域の一種の観念的分断であって、それは今日までつづいている。すなわち、かたや市場、かたや宗教というわけである。」（372 頁）

## 第 10 章 中世（600～1450 年）

「枢軸時代において商品市場と普遍的世界宗教という相補的な理念の出現がみられたとすれば、中世は、それら二つの制度が合流しはじめる時代であった。

どこであれ、それは帝国の崩壊とともに始まった。やがて、新しい国家が形成されたが、それらの諸国家においては、戦争と地金と奴隷制のあいだにむすばれた紐帯は解体してしまう。征服のための征服や富の獲得のための富の獲得が、政治的生活全般の目的として称賛されることはもはやなくなった。それとともに、国際的交易の管理運営から局地的市場の組織化までをふくむ経済生活は、宗教的権威の規制によってますます衰退していった。・・・だとするなら、ここにある中世は、わたしたちがこれまでなじんできたものとは異なった中世である。わたしたちのほとんどにとって、『中世』とはいまだ、迷信と不寛容と圧政の同義語である。しかし、地球の居住者ほとんどにとって、それは枢軸時代のさまざまな恐怖からのめざましい改善としか映らなかっただろう。」（376 頁）

「とはいえ、固有の意味での中世のはじまった場所は、ヨーロッパではなくインドや中国であり、400 年から 600 年のあいだのことである。それからイスラームの擡頭とともに、ユーラシア大陸の西半分を席卷していった。それがヨーロッパに到達したのは、ようやく 400 年後のことだったのである。」（378 頁）

インド

中国

寺院の宝物庫

「集中的金融資本の諸形態であった。宝物庫はつまるところ、儲かる投資の機会をたえず求めている僧院株式会社によって管理された膨大な富の集積だった。」（395 頁）

「中世を特徴づけるのは、抽象化への全般的運動である。真金や真銀の大部分が教会や僧院、寺院に集中し、貨幣はふたたび仮想的になった。それとともに、そうした過程を規制すべく、とりわけ債務者たちになんらかの保護を与えるべく、広範なモラルにかかわる諸制度を設立する、そのような傾向がどこにおいてもみられるのである。」（400 頁）

イスラーム

ヨーロッパ、キリスト教世界

「貨幣は仮想的領域に撤退していった。人びとはみな、ローマの通貨で、そしてのちにはカロリング王朝の『想像貨幣』によって経費の計算をつづけていた。」（419 頁）

「イエスは貧しき者とともにあるのだから、慈善という贈与はイエスへの貸出であり、それはこの世では考えられない利子とともに天国で払い戻されるであろう、というわけだ。」（425 頁）

「近代的銀行の先駆は、通常テンプル騎士団として知られている・・・戦闘的な修道士たちの集団であった彼らは、十字軍を資金援助するうえで中心的役割をはたした。・・・要するに、キリスト教徒が最初にイスラームの金融技術を導入したのは、イスラームに対する攻撃を資金繰りするためであったようにおもわれる。」（433～4 頁）

「銀行史においてイタリア人は、複雑な株式組織や率先してイスラーム式の交換券を導入

したことで、とりわけ有名である。それらは当初、きわめて単純なものだった。基本的に長距離両替の一形式にすぎなかったのである。」(434 頁)

では中世とはなんだったのか？

「中世特有の制度や観念がヨーロッパに到来したのがあまりにも遅かったので、わたしたちはそれを近代の最初の鼓動と誤解する傾向がある。為替手形は、東洋ではすでに 700 年から 800 年には使用されていたのだが、それがヨーロッパに到来するのはその数世紀後のことだった。おそらく典型的な中世の独立大学が、もうひとつの例である。」(441 頁)

「枢軸時代が唯物論的な時代だったなら、中世はなによりも超越性の時代であった。古代帝国の崩壊のあとに新しい帝国の勃興をみるといったことはほとんど起きなかった。そのかわり、かつて反体制的であった大衆宗教運動が支配的な制度へと一躍成り上がる。」(441 頁)

「中世の思想にひとつの本質があるとするならば、それは権威への盲従のうちにはなく、わたしたちの日常活動——ことに宮廷と市場——を支配する諸価値は、混乱し、過誤にあふれ、錯覚に満ち、倒錯しているという根強い信念のうちにあった。真の価値はどこかべつの場所に、つまり、直接知覚することはできないが学習と瞑想によってのみ接近しえる領域にある。しかしこのことが、転じて、瞑想の権能と知の問題全体を、解決なき問いにってしまったのだ。」(442 頁)

「おどろくべきことだが、儒教による商人への非難とイスラームによる商人の礼賛は究極的にはおなじ帰結に達している。すなわち、双方とも市場の繁栄した豊かな社会であったが、近代資本主義の特徴となる大規模なマーチャントバンクや産業機構を形成することはなかったのである。」(450 頁)

法人の観念はヨーロッパ中世の産物 (451 頁)

## 第 11 章 大資本主義帝国の時代 (1450 年から 1971 年)

### ○ 12. 資本主義の起源

「したがって、資本はたんなる貨幣ではない。貨幣に転化する富ですらない。とはいえ、貨幣を用いてさらに貨幣をつくるべく政治権力を利用することでもない。・・・だが、貨幣は一貫して政治的道具でありつづけた。帝国が崩壊し軍隊が解除されると、装置全体があっけなく雲散霧消したのはそのためである。ところが、新たに擡頭してきた資本主義的秩序のもとでは、貨幣の論理に自律性が与えられた。政治的・軍事的権力は、徐々にその貨幣の論理の周辺に再編成されるようになる。これこそが、国家と軍隊をそもそも背後に抱えていなければ決して存在しえぬ金融の論理だったのだ。」(474 頁)

#### 第二部 信用の世界と利子の世界

##### 信用取引の世界での市場

「市場はこの相互扶助のエートスに矛盾するものとみなされてはいなかったのだ。・・・市場は完全に信頼と信用を通して作動するからである。」(486 頁)

「それゆえ、資本主義の起源の物語は、市場の非人格的力による伝統的共同体の段階的解体の物語ではないのである。それはむしろ、信用の経済がいかんして利益の経済にて転換されたのかという物語であり、非人格的——でしばしば報復的——な国家権力の侵入によってモラルのネットワークが段階的に変容させられていく物語なのだ。」(491 頁)

##### 第三部 非人格的信用貨幣

「貨幣とは社会的習慣であるという観念が決定的にしりぞけられたこの冷酷な唯物論の時代に、近代資本主義の典型的な特徴となった幾多の新しい信用手段や金融的抽象化の形式に加え、紙幣の発生を目の当たりにするのはどういうわけか？これらのうちのほとんど——小切手、債権、株式、年金など——が中世の形而上学の世界に起源を有している。だが、それらが大輪の花を咲かせたのはこの新時代においてだったのだ。

とはいえ、現実の歴史に目をむけてみれば即座にわかるのは、こういった貨幣の新しい諸形態によっても、貨幣は金銀の『内在的』価値に基礎づけられているという前提が覆さ

れることは決してなかったということである。」(498 頁)

「銀行家によって中世国家がうまく統治されていたところでは、政府の財政を操作することは、より安全でより利益を生むことがわかっていた。近代的金融手段の歴史そして紙幣の究極の歴史は、地方債発行とともに始まった。この慣行は、納税市民に強制融資を課し、それぞれに年率5パーセントの利子を約束し、『債券』または契約を交渉可能事項とすることで国債による市場を創設したのである。」(499~500 頁)

「16 世紀までに、すでに商人たちは為替手形を利用して負債を決済していたものの、政府の諸々の債券——ラント〔フランスの利付国債〕、フーロス〔スペインの年金型債券〕アニュイティ〔年金〕——こそが新時代における真の信用貨幣であった。」(500 頁)

「イングランド銀行が創設されたのはロンドンとエディンバラの商人 40 人——その大部分がすでに国王への債権者であった——からなる協会が、対仏戦争を援助するため、国王ウイリアム三世に 120 万ポンドの融資をおこなったときであったこととおもいだそう。その見返りとして銀行券発行を独占する株式会社を許可するよう、彼らは王を説得した。そして、その銀行券は、事実上、王が彼らに負っている額面の約束手形だったのである。これが世界初の独立した国立中央銀行であり、それは小規模の銀行間でやりとりされている負債の手形交換所となった。その手形が、まもなく、ヨーロッパ初の国家紙幣に発展していくのである。」(501~2 頁)

● 銀行券と国家紙幣の違いが不明

### ○ 13. 資本主義とはなんなのか

第四部 それで、結局、資本主義とはなんなのか？

「ここでわたしたちは奇妙な逆説に直面する。資本主義と関連づけられるようになった金融装置を構成するほとんどすべての要素——中央銀行、債権市場、空売り、証券会社、投機バブル、証券化、年金といった——が、経済学という科学のみならず、工場そして賃労働にさえ先だって出現していたのである。このことはおなじみの見方に対する真の挑戦である。」(509~10 頁)

「かつて人びとに身の周りのすべてを潜在的な利潤の源泉としてみることを強制していた非人間的な仕組みだったものが、人間の共同体それ自体の健全性を判断する唯一の客観的な尺度と考えられるようになったのだ。

わたしたちの基盤となる日付である 1700 年を出発点としてみるならば、近代資本主義の黎明期に現れるのは信用と負債の巨大な金融装置である。」(510 頁)

第五部 黙示録

信用制度を人びとが永続すると考えるときにそれは爆発する。

「じぶん自身の永続性を見通しを示されるや、資本主義——あるいは金融資本主義——は、端的に爆発するのである。というのも、資本主義に終わりがないとすれば、信用——つまり未来の貨幣——が永続的に生成されつづけない理由はまったく存在しないからである。最近の出来事がこのことを証拠立てているのは確実である。2008 年にいたるまでの期間は、多数の人びとが資本主義は本当に永続するのではないかと考えはじめた時期であった。少なくとも、その代案を想像することは、もはやだれにもできないようにおもわれた。その直接的帰結が、ますますむこうみずになるばかりのバブルの連鎖だったのであり、それが装置全体を崩壊にみちびいたわけである。」(531 頁)

第 12 章 いまだに定まらぬなにごとのかのはじまり (1971 年から今日まで)

### ○ 14. ニクソンショック

1971 年ニクソンショックから説き起こしている。

ドルが金から切り離されたこと (532 頁)

金準備がどこに保管されているか。宣伝パンフがあり、見学できる。(536 頁)

「この章で試みるのは、第一に、現在のシステムがどのように機能しているかを詳細に分析することよりも、次の点について認識しようというものである。これまで分析してきた

長期のパターンは現在どのように作動しているのだろうか、そのパターンはわたしたちの将来について少なくともヒントを与えてくれるだろうか、というのも現代はまちがいになく過渡的な時代だからである。」(537 頁)

「その一方で、人類学者としては、このような混乱したシンボルのはたらきはそれ自体において重要であること、さらにそれが表象していると主張する権力の諸形態を維持するうえで主要な役割を担っていること、そう考えざるをえない。これらのシステムが機能するのは、実際のところ、それがどのように行動しているのかだれも知らないがゆえにのことなのだ。」(537 頁)

「合衆国は、常にある種の『市場ポピュリズム』に支配されてきたのであり、銀行のもつ『無からカネをつくる』能力——そしてそれ以上に、だれかが『無からカネをつくる』ことを妨害する銀行の能力——は、常に市場ポピュリズムたちの心配の種であった。というのも、市場とは民主主義的平等の単純な表現であるという思想に、それは直接に矛盾するものだったからである。」(537 頁)

「すなわち戦争と軍事力の役割である。魔法使いが無から貨幣を創造する奇妙な能力を保持していることには理由がある。その背後には、銃を持った男が控えているのだ。

なるほど、ある意味では銃をもった男はことのはじまりからそこにいた。すでに指摘したように、近代の貨幣は政府債務『国債』に基盤をおいているし、政府が債務を負うのは戦費調達のためである。・・・中央銀行の創設が表現していたのは、戦士の利害と金融業者の利害との結合の恒常的な制度化であり、ルネッサンスのイタリアに端緒をおいている。それがやがて金融資本主義の基盤になったのである。

ニクソンがドルを変動化させたのも戦費捻出のためであった。」(538 頁)

「ドルを変動化することによってニクソンは、合衆国通貨を純粋な『法定不換紙幣』——合衆国政府がそう主張することによってのみ貨幣として扱われる内在的価値のないただの紙片——へと転換させた。そう多くのひとが考えている。だとすると、いまや合衆国の軍事力のみがその通貨を支えているのだと主張することもまたできよう。ある意味でのこの主張は正しい。しかし『法廷不換紙幣』という観念は、貨幣はもともと金で『あった』ということを前提としている。ところが、本当のところ、わたしたちが目にしてるのは、信用貨幣の新手の変異体なのである。

一般的に信じられていることとは逆に、『好きなときにお札を刷る』ことを合衆国政府はできない。なぜならアメリカの貨幣は、連邦政府によってではなく、連邦準備制度の保護のもとで、民間銀行によって発行されるからである。連邦準備機関は——その名称にもかかわらず——特殊な形態の官民混成体であり、いくつもの民間銀行の共同事業体なのだ。運営委員会こそ議会の承認にもとづいて大統領に任命されるものの、それ以外は自律的に操業されているのである。アメリカで出回っているすべてのドル紙幣は『連邦準備銀行券』である。つまり連邦準備制度がそれを約束手形として発行し、それぞれの紙幣に 4 セントずつ支払って合衆国造幣局に印刷を委託する、というものである。このような仕組みは、もともとイングランド銀行によって開発された図式の一変異体である。つまり、連邦準備制度が財務省長期証券を購入することによって合衆国政府に金銭を『貸付け』、それから政府が負っている（政府の借金である）額面を他の諸銀行に貸し付けることによって、合衆国の負債を貨幣化するのである。」(539 頁)

「たとえば、連邦準備制度は、技術的には、財務省長期証券を買い上げることによって政府に金銭を直接に貸し出すことはできない。だが、だれもが知っているように、間接的にその貸し出しを行うことが第一の存在理由なのである。そして、政府が財務省長期証券を発行するかぎりにおいて、それはある意味で実際に紙幣を印刷することに等しい。」(540 頁)

合衆国の負債は一貫して戦費である。  
「合衆国の軍隊は、それ以外のどの軍隊とも異なり、グローバルな権力掌握を指針としつづけている。海外に設置されたおおよそ 800 の軍事基地を通し、地球上のどこへでも強靱な力で介入するべし、なる指針である。」(541 頁)

「実際、まさにこの壮大な／宇宙規模の力こそが、ドルのまわりに組織された世界の貨幣制度を統合しているといってもいいすぎではない。」(541 頁)

#### 象徴的権力

「それが効力をもつには、直接的な脅かしによってでなく、暴力を行使する方途についての桁外れに優位な知識によって規定される政治的環境を創出することによってである。そして、暴力の行使が、ごくつましやかで大部分が象徴的なかたちをとることをやめ、それ以上の強度に上昇するや、この絶対的権力の感覚は崩壊する傾向があるのだ。」(541～2 頁)

「このように、自由に変動するドルの登場から直接にもたらされた諸々の帰結は、資本主義自体がそもそも基礎をおいていた戦士と投資家の同盟との決別ではなく、むしろその究極の神格化とでもいうべき事態を示している。またその仮想貨幣への回帰が、名誉と信頼の諸関係への大いなる回帰にみちびかれることもなかった。現実はその真逆である。だが、わたしたちがいま問題にしているのは、これから何世紀もつづくであろう歴史的時代の端緒である数年なのだ。」(544 頁)

#### ○ 15. クレジット経済

クレジットカード、VISAとMasterCard 1968年登場、アメリカンエクスプレス もっと後。キャッシュレス経済は、1990年代になってから。

「これらの新しい信用システムはすべて、人びとの間の信頼関係によってではなく、利潤追求を旨とする株式会社によって仲介されている。そして合衆国のクレジットカード産業の最初期かつ最大の政治的勝利は、利子を課しうる可能性を秘めた対象に対するすべての法的制限の撤廃であった。

歴史を参照することに意味があるとすれば、仮想通貨の時代とは、戦争、帝国の構築、奴隷制、負債懲役制度からの離脱でなければならず、かつ地球的規模にわたる債務保護の制度の構築にむかわねばならないはずである。ところが、わたしたちはこれまで、それとは反対の事態を経験してきた。新しい世界通貨は古い世界通貨以上に、軍事力にしっかりと根づいている。」(544 頁)

#### IMF

「擡頭しつつある強大な官僚制度の頂点に立っているのがまさに IMF である——人類史上初の純粋にグローバルな管理機構であり、国連、世界銀行、世界貿易機構のみならず、それらと提携する、経済同盟、貿易組織、非政府組織などの無数の組織から形成されている——その大部分が合衆国の庇護下で創設されたものである。」(545 頁)

「ハドソンが『負債帝国主義』と呼んだニクソンの策略は、すでにはなはだしい制度疲労のもとにある。」(545 頁)

反グローバリゼーション運動。東アジアとラテンアメリカでの財政反乱。2002年アルゼンチンの債務不履行、逃げ切り。軍事的冒険の失敗

「合衆国金融産業は、ほぼ好き勝手に通貨を創造する権利を確保するところまでいったにもかかわらず、数兆の支払い義務を累積させ、世界経済をいきづまりにみちびき、全面崩壊寸前にまで達してしまっただけでなく、そのあと合衆国は、負債帝国主義が安定性を保証すると言いつつ、力を失ったのだ。」(546 頁)

「他方、アメリカの民間銀行は、市場経済というシステムにそった運営云々のお題目をすべて放りだし、すべての資産を連邦準備制度の金庫に移動することでこの暴落に対処したわけである。」(547 頁)

「だが、中国の参加はそこに全く新しい要素を導入したのである。中国の視点に立つてみると、まさにこれは、合衆国を伝統的な中国の従属国にしていく長期の過程の第一段階であると考えていることに、それほど無理はない。」(550 頁)

「ここまでわたしが述べてきたことはどれも、本書において一貫してきた一つの現実——貨幣には本質はない——を、特に強調してくれるものである。それは『現実』なものでもない。だから、貨幣の性質なるものは、これまで、そしておそらくこれからも、政

治的な係争の問題であるのだ。」(550 頁)

「2008 年の大暴落についても同様の視点からみることができる。つまり、債権者と債務者、富者と貧者のあいだの長年に渡る政治的な抗争の帰結とみなすことができるのである。実際、ある次元においては、それはまさに見かけどおりのものである。要するに、詐欺、信じがたいほど洗練されたポンジスキームである。しかし、次元を移動してみれば、それは貨幣と信用の定義をめぐる闘争の頂点とみなすこともできるのだ。」(551 頁)

## ○ 16. 新自由主義

19 世紀における階級闘争への恐怖が第二次大戦後は、北米の支配階級にとっては失せていた。暗黙のうちでの労使の階級闘争の一時的休戦  
労働者の生産性増大が賃金上昇によって報われる (1970 年代後半まで)。ケインズ時代、産業民主制。この契約の拡大が進む。

「1970 年代のある時点において事態は分岐点にいたった。ひとつのシステムとしての資本主義には、契約を万人に拡大することは不可能であることが端的にあきらかになったのである。」(554 頁)

「この帰結については、包摂の危機と呼ぶことができるかもしれない。1970 年代の後半には、現存する秩序があきらかに崩壊をはじめ、財政混乱、食料暴動、石油危機、成長の終焉や生態系の危機をめぐる終末論の横行などに同時に悩まされるようになった。やがてあきらかになったように、これらすべてが、それぞれの仕方で、民衆に対してこの契約の果たされぬことを告知していたのである。」(554~5 頁)

1978 年から 2009 年までのほぼ 30 年間、同じパターン。

「生産性と賃金のつながりはばらばらに解体された。生産性の比率は上昇し続けたものの、賃金は停滞するかあるいは低落していった。」(555 頁)

マネタリズム、通貨供給量の管理。

「まずこれは、『マネタリズム』への回帰をともなった。つまり、貨幣はもはや金やそれ以外の商品に基礎をおいていないにしても、政府と中央銀行の政策は、まず通貨供給量を慎重に管理することで、あたかもそれが希少な商品であるかのようにふるまうよう保障すべきであるというものである。そのような資本の金融化の意味が、市場に投資される貨幣のほとんどが生産や通商のあらゆる関係から切り離されてしまうこと、そして純粋な投機と化してしまうことであるとしても。」(555 頁)

### ● マネタリズムと金融化との関係。区別がない。

「新しい分配体制においては賃金はもはや上昇せず、そのかわり労働者たちは資本主義の断片を購入するよう奨励されるようになった。金利生活者を安楽死させるかわりに、今や万人が金利生活者になることができるというわけである——実質的には、劇的に高まっていくじぶん自身への搾取率が生み出した利潤のわずかの断片を分けてもらえるということだったのだが。」(555 頁)

年金の運用 確定拠出年金

クレジットカード

「このとき多くの人びとにとって、『資本主義の断片を購入すること』ということの意味はこっそり変貌をとげ、ワーキングプアにはおなじみの災厄の種——サラ金や質屋——と見分けのつかなくないものになっていった。」(556 頁)

1980 年合衆国の金利法の廃止、7~10%を無制限にした。

金融の民主化、日常生活の金融化、という脚色。

「わたしたちはだれもが、投資家と実務執行者のあいだのかねてよりの関係——すなわち、冷徹に計算する銀行家と、借金を負い自尊心のいっさいを捨て名誉なき機械にみずからを貶めた戦士たちの関係——をめぐる組織された小株式会社として、みずからを認知するようになったのである。」(557 頁)

「いいかえると、こうして名誉という原理が市場からほとんど完全に駆逐されたのだ。おそらくその結果、負債という主題全体が宗教的な後光に包まれるようになる。」(557 頁)

「いまや万人が負債を抱えているという事実（合衆国の家庭の負債は今や収入の130%平均という推定である）この負債が競馬で一発あてようとしたとかぜいたくしたといった理由でかさんだものでないという事実である。それは、経済学者たちが裁量消費支出と呼んでいる出費のために借りたもの、つまり、主要には子どもに与えられ、友人たちと共有され、あるいはさもなくば他者との関係——要するに単なる物質的計算以外のなにものかを基盤にした関係——を構築したり維持したりするためのものである。いまやひとが単なる物理的生存を超えた生を獲得するためには、負債に依存せねばならないのである。」（560頁）

「わたしたちは、いま、真に特異な歴史的転換期を生きている。信用危機は、前章で提起した原理、すなわち、資本主義はそれが永続するであろうと人びとが信じる世界においては機能することはできないという原理を、生々しく描写している。」（563～4頁）

社会運動の展望を見出せず、抵抗運動が勝つことはないという意識に追い込む執念。恐怖と愛国主義的順応と、絶望感。

## ○ 17. 対抗策

「銃器や監視カメラやプロパガンダ機関は、総じてとてつもなく高額で、実際にはなにも生産せず、まちがいなく資本主義システム総体を疲弊させる——そもそも終わりなきバブルの基盤となった、終わりなき資本主義の未来という幻想の生産とともに——要素のひとつでしかない。」（565頁）

「いいかえると、すべてを管理する唯一の方法として資本主義を制度化せねばならないという政治的義務と、投機が統制不能な混乱におちいらぬようその未来の地平を限定せねばならないという資本主義そのものの公認されざる必要性のあいだに、深刻な矛盾があったのだ。そしていったん制御不能の混乱が起こるや、機械全体が内破し、わたしたちは、事態を建て直すそのようなべつの方法をも想像することさえできないという奇妙な状況に取り残されたのだ。わたしたちが想像することのできる唯一のものは、破局である。」（565～6頁）

「じぶん自身を解放するためにわたしたちが最初になすべきこと、それは、ふたたびみずからを歴史的な行為者、世界の出来事の流れに変化をもたらすことのできる民衆とみなすことである。歴史の軍事化が剥奪しようとしているのは、まさにこれなのだから。」（566頁）

「〔今回の〕仮想通貨への回帰は、帝国と強大な常備軍からの離脱と債権者による強奪に制約をかける大きな構造の創出にいたりつくだろうか？」（566頁）

「本書でわたしが試みたのは、次代の展望を提示することではなく、わたしたちの視野を開放し、わたしたちの可能性についての感覚を拡大することであった。つまり時代にふさわしい大きな尺度と規模で思考を開始するとはどういうことか、問いかけはじめることである。」（566頁）

モラル的・金融的革新 最初は前3000年、有利子負債の発明。ついで、800年、有利子負債を破棄した最初の洗練された商業システムの発展。現在は三番目の革新。

市場の歴史的回顧 最初の市場、古代メソポタミア、大掛かりな行政システムの副産物で信用によって機能していた。現金市場は戦争によって現れた。租税と貢納制度の下での兵士への報酬支払が硬貨でなされ市場で取引されるようになる。

中世になって初めて、信用システムへの回帰とともに市場ポピュリズムとも呼ぶべきものが現れる。「その思想は、市場が国家を超え、諸国家に対抗し、諸国家の外でこそ存在するというものであった。」（568頁）

人間経済の市場経済への転化。戦争、征服、奴隷制がそれを担った。

市場を人間的自由の最高表現であるという考えにとりついているもの、非人格的で商業的な市場は、歴史的に窃盗に起源をもっている。物々交換の神話は、これへの対抗。

「市場は、ひとたびみずからの暴力的起源から完全に手を切ることができるようになると、きまって別のものへと、たとえば名誉、信頼、相互的紐帯などの織り成すネットワークへと成長していく。」（571頁）

結論

宇宙秩序に負債を負っているという考え、自身の存在基盤と交渉できるという間違った考えに基礎をおいている。逆に世界こそが、あなたから生を借りている。

「わたしにとって、まさにこれこそ（金融の命法）が負債のモラルリティをかくも邪悪にしているものなのである。すなわち、金融の命法が、たえずわたしたちを、好むと好まざるとにかかわらず、たんにカネになるものとしてしか世界をみない略奪者もどきへと還元している、そのやり方である。」(575 頁)

「現在の経済秩序がはらんでいる自己破壊衝動を共有しようとしなさい、新しい経済秩序の先駆者」(576 頁)

借金は返すべきというモラルへの批判。この原理が破廉恥なウソだった。

「つまるところ負債とはいったいなにか？負債とは約束の倒錯にすぎない。それは数字と暴力によって腐敗してしまった約束なのである。」(578 頁)

真の自由：「いかにしてわたしたちは、それを発見することのできる場所にまでたどりつくのか、である。」(578 頁)

あとがき：2014 年

以上で引用はおわり。あとにルネサンス研究所関西 1 月例会のレジュメから、私の報告を掲載しておこう。

## 第二 負債経済における対抗政策について（1 月例会レジュメ）

### 1. 負債経済論の構想

#### 1) 負債経済の定義

負債経済とは、グローバル資本市場において、お金にお金を生ませる手段である金融商品の由来が、債務を資本として機能させる近代的利子生み資本とは異なるものによって形成される経済領域を指す。近代的利子生み資本とは異なるものとは、国債があり、また、投資銀行によって消費者金融などの債務の証券化による金融商品が生成されている。これらの金融商品が売買される経済領域を指す。

#### 2) 負債とは何か。

近代資本主義は、他人から借金し、その負債を資本として使用して儲ける機能資本家を生みだした。この借手は従来の借り手である国家や貴族や商人や農民たちと比べてリスクが少なく、貸し手は低利で貸し付けた。近代社会に、根本的に異なる二種類の負債が生まれた。

借りた金で儲ける仕方は古くからあった。古代では海外交易に携わる商人たちがその担い手であり、外国貿易に伴う為替の金融も発達したが、リスクが高く、低利の貸付は実現しなかった。

資本主義のもとでの貨幣資本家による機能資本家への貸付は、機能資本家が借りた貨幣を資本として使用し、剰余価値を生産するが、この剰余価値から機能資本家には利潤が、そして貨幣資本家には利子が支払われる。だから利子の大きさは剰余価値を超えられず、貨幣資本家は高利は取れないがしかし貸付額が巨大となるので、低利での貸付が定着した。

つまり負債には二種類あり、借りた貨幣を資本として機能させる場合と、消費の用途にする場合である。後者はかつては国家の戦費や王侯貴族の浪費、飢饉のときの農民の生計費などであったが、現在では消費者ローンとなっている。

利子生み資本と負債資本、共に外観は貸付けた貨幣に利子がつくというものだが、借りた貨幣がどのように機能しているか、その違いを明らかにするために、借りた貨幣が資本としては機能していない貸付け資本を負債資本と規定しよう。

#### 3) 資本主義の発展段階



耐久消費財と消費者ローンの発展  
資本主義の不平等発展

4) 負債資本のヘゲモニー形成過程

2. 政策立案のために  
(略)